

## 注 意 書

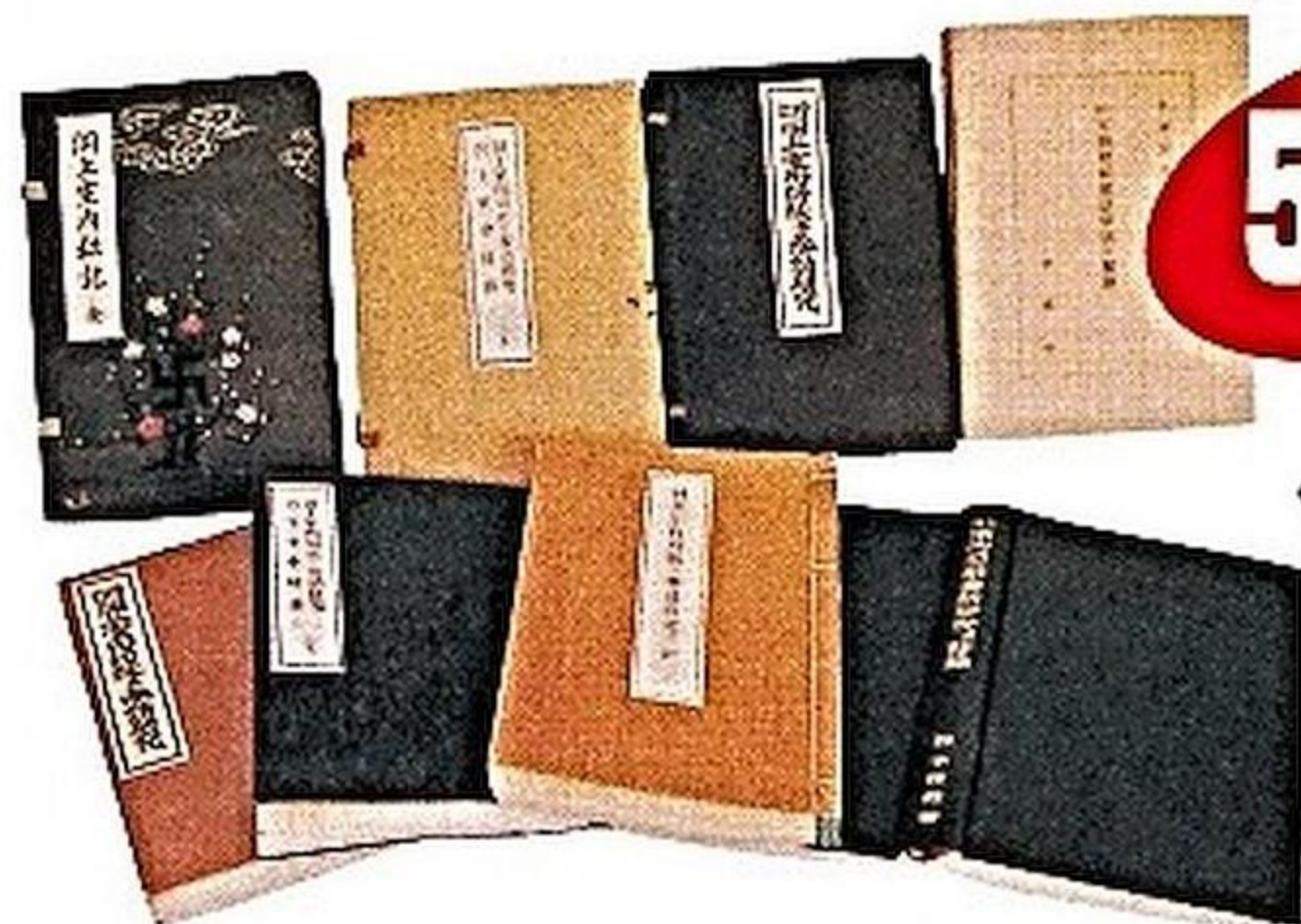
収2210053号  
令和4年10月12日

整理番号	注78	排 架	通常
書 名 卷 号 等	修証義説教大全		
発行年月日	明治35年11月	請求記号	318-60
<p>本資料は、別添文書のとおり差別を助長するような問題のあるものであるとして、編著者から注意の表示を求める申出があったものである。</p> <p>本資料を利用するに当たっては、申出の趣旨を十分に理解の上、臨まれたい。</p>			
国立国会図書館			



回収率

51.8%



● 級差別氏、ハンセン病者、精神に障がいを持つ人びとに対して、葬儀の際に「差別儀礼」を行うように指導している

## 洞上室内切紙参話研究並秘録

(洞上室内切紙並参話研究手記)

(洞上室内切紙並参話研究、洞上室内秘録合本)

「補訂覆刻版」との交換

「差別図書」を放置しておくことは、新たな差別を生み出す可能性を残すばかりではなく、放置しておくこと自体が実は差別を容認していることとなります。ぜひとも、もう一度、書棚や書庫をご点検いただき、新たに「差別図書」が見つかったときには、回収にご協力下さい。回収にご協力いただいた方には、当該書籍に「注意書き」や「解説」を付した「補訂覆刻版」を交換本としてお送りしております。詳細は人権擁護推進本部へお問い合わせ下さい。

提出先：曹洞宗人権擁護推進本部

〒105-8544 東京都港区芝2-5-2 ☎03-3454-5411(代表)

☎03-3454-3546(直通) FAX 03-3454-7699

### 「差別図書」回収状況

2018.2.25 現在

書名	発行	発行部数	回収部数	回収率%
洞上室内切紙参話研究並秘録	4種7版	6000	3112	51.8%
禅門曹洞法語全集・坤 (初版部数不明)	2種3版	700	607	86.7%
曹洞宗全書 拾遺 (初版部数不明)	2種2版	1233	998	80.9%

回収率

86.7%

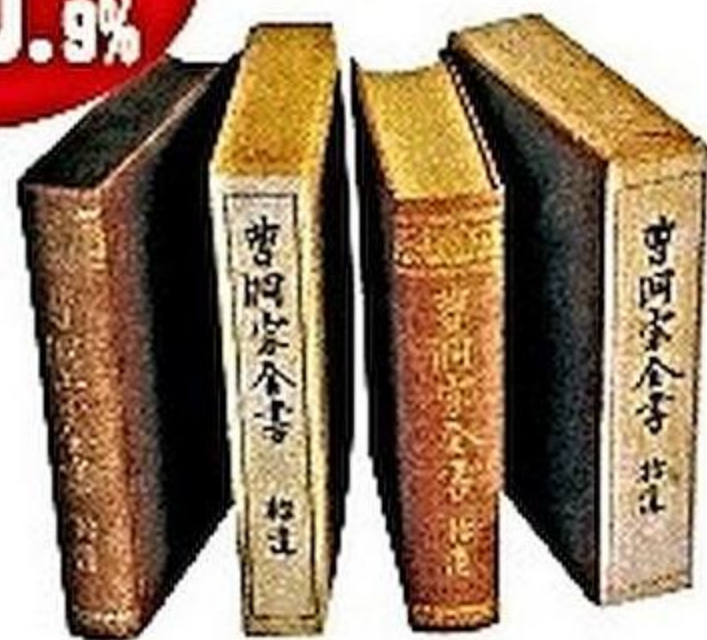


## 禅門曹洞法語全集・坤

● 「差別戒名」の指南書である「禅門小権則」が収録されている

回収率

80.9%



## 曹洞宗全書 拾遺

● 「悲しき業論」に根ざした考え方の「切紙」を収録  
● 「差別儀礼」を修行せよと指導している

「差別図書」の回収にご協力をお願いします。

完全回収に

「差別図書」の回収にご協力をお願いします。

曹洞宗では一九八二年一月より「差別図書」の回収に取り組んでいます。



「曹洞宗修証義説教大全」にみられるような「修証義」の差別説教、なかんずく「旃陀羅」の問題などは、「宗典」の解説に関する問題であり、宗門の教えと深く関わる問題です。

「修証義」の「三時業」などに関わる悪しき「業」論の問題では、これまでの検討によって、差別につながるいくつかの説教のパターンがあることを確認しております。今後は、「曹洞宗修証義説教大全」のような「説教書」の類の差別事象の総点検を行い、その誤りを指摘し、差別を繰り返さないための取り組みを行ってまいります。

つきましては、各位において「曹洞宗修証義説教大全」が蔵書の中にあるかどうか、その有無を点検され、「差別図書」回収へのご協力をお願いいたします。

### 「曹洞宗修証義説教大全」中の差別事象例

「種姓」といふは、天然には四姓といふて、波羅門、刹帝利、毘舍、首陀と稱する四通の人民の階級がある、丁度日本の古代の源平藤橘の四姓、徳川幕府時代の士農工商の階級のやうなものである、そのほかに旃陀羅といふて日本の昔の穢多のやうな一階があつて、身分の高い者は低い者を牛馬犬猫同様に扱ふ風があつた。

（『曹洞宗修証義説教大全』三五八頁―三五九頁抜粋）

②「穢多」という差別語が使用されているのみならず、それを「旃陀羅」というインドの「ダリット（被差別民衆）」にあてはめ、さらに身分制度や差別に対して無批判で肯定的な説明をし、文章全体が差別的な内容となっている。

## 曹洞宗修証義説教大全

明治三十五年十一月十八日印刷発行  
昭和十七年五月十日第八版發行

修証義説教大全  
定價金貳圓參拾錢

不  
許  
復  
製

會社番號119322號

編者 曹洞宗務局文書課  
今日立  
印刷者 東京市神田區小川町二二〇  
東京市下谷區神田區二二七八  
所製洋金製

發行所

東京市神田區  
小川町二二〇

光融館書店

電話 東京二〇七二番  
東京二二二二番

配給元 東京市神田區法善町二ノ九 日本出版配給株式會社



### 「曹洞宗修証義説教大全」回収について

「曹洞宗修証義説教大全」は、明治期の曹洞宗の「宗報」第71号（1899〈明治32〉年12月1日、曹洞宗務局文書課、月二回発行）から「宗報」第126号（1902〈明治35〉年3月15日発行）まで「修証義」に関する説教が連載され、それが一冊の本にまとめられる形で出版されたものです。

編著者は曹洞宗務局文書課（ただし昭和2年の第七版のときのみは「釋宗演」が著者となっているが、これは誤植で後に訂正されている）、発行所は光融館（東京市神田駿河台袋町一番地、現在不明）となっています。

1902〈明治35〉年11月18日に初版発行、版を重ねること八回、第八版は1942〈昭和17〉年5月10日の発行です。発行部数、販売部数などについては現在までのところ明らかになっておりません。

本書には部落差別はじめ身分、職業、性、民族に関わる差別事象が確認されています。早急に書庫、書棚等をご点検いただき、所蔵されていた場合には、すみやかに回収にご協力ください。

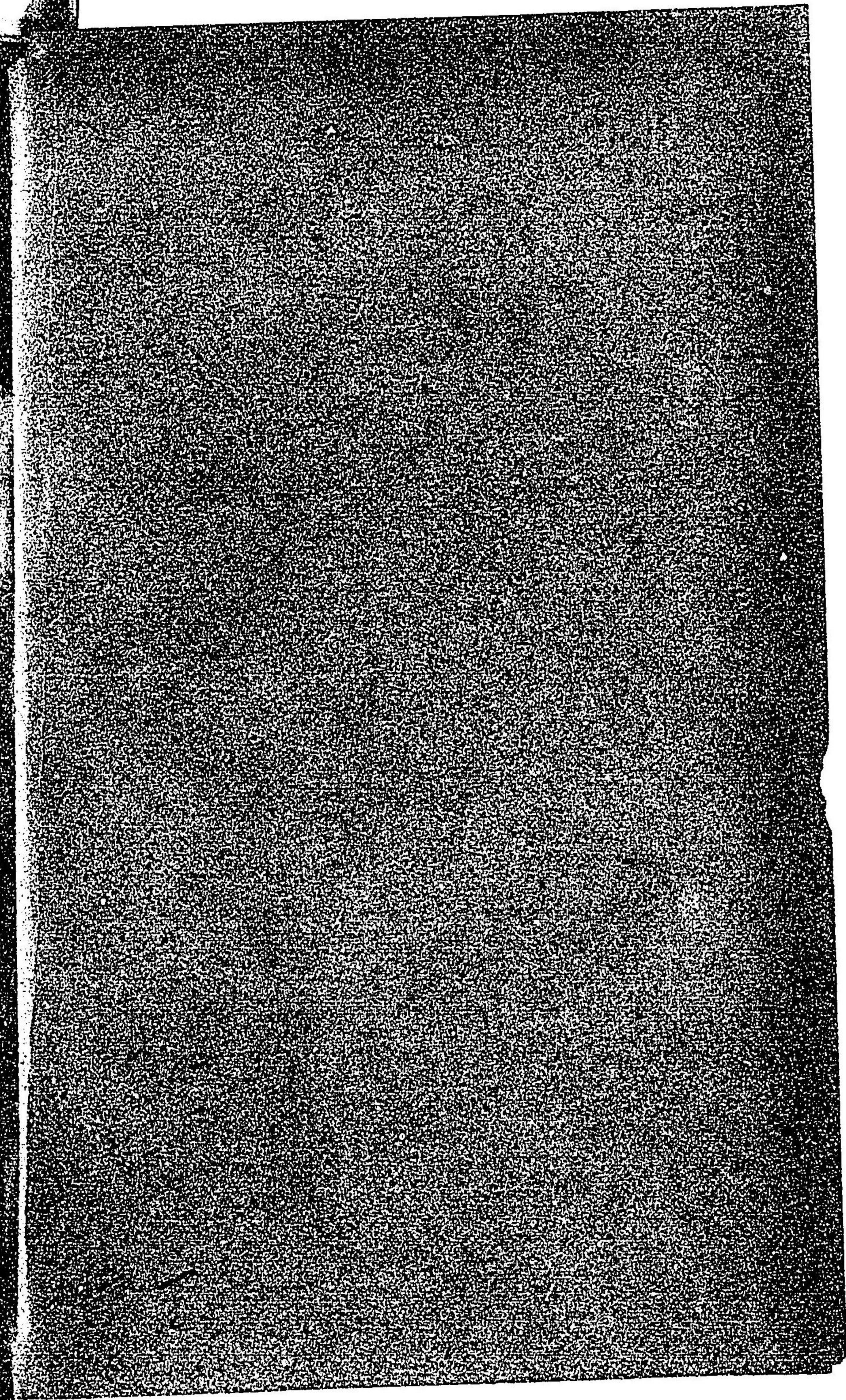
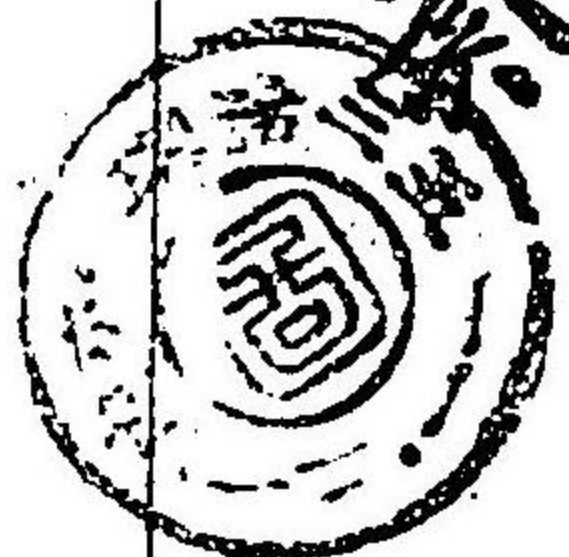


318-60

曹洞宗務局文書課編纂

修證義說教大全

曹洞宗務局文書課藏版





## 緒言

本書は曩に本課に於て特に宗門の碩學老匠に托して修證義說教の講録を編纂せしめ毎節之を『宗報』に掲載して闔宗に頒てり今や完結を告げたるを以て更に校訂を加へて一部の書となす闔宗の縉素本書に據りて布教傳道に従事し若くは信仰を涵養せば庶幾くは正鵠を失はざらん

明治三十五年十月

曹洞宗務局文書課



# 曹洞宗修證義說教大全目次

第壹章 綱要(上)	一
第貳章 綱要(下)	一五
第壹章 總序	
第壹節	三〇
參考	四〇
第貳節	四三
參考	五二
第參節	五五
參考	六七
第四節	七〇
參考	八一



第五節 ..... 八三

參考 ..... 九四

第六節 ..... 九七

參考 ..... 一〇六

第貳章 懺悔滅罪

第七節 ..... 一〇八

參考 ..... 一二〇

第八節 ..... 一二三

參考 ..... 一三六

第九節 ..... 一三八

參考 ..... 一四七

第十節 ..... 一四九

參考 ..... 一六三

第參章 受戒入位

第十一節 ..... 一六五

參考 ..... 一七七

第十二節 ..... 一七九

參考 ..... 一九一

第十三節 ..... 一九三

參考 ..... 二〇六

第十四節 ..... 二〇八

參考 ..... 二一九

第十五節 ..... 二二一

參考 ..... 二三三



第四章 發願利生

第十六節	.....	二三五
參考	.....	二四一
第十七節	.....	二四三
參考	.....	二五一
第十八節	.....	二五三
參考	.....	二六一
第十九節	.....	二六三
參考	.....	二七二
第二十節	.....	二七四
參考	.....	二八一
第二十一節	.....	二八三

第二十二節	.....	三〇二
參考	.....	三〇四
第二十三節	.....	三一四
參考	.....	三二四
第二十四節	.....	三二六
參考	.....	三三四
第二十五節	.....	三三六
參考	.....	三四五
第二十六節	.....	三四六
參考	.....	三五四
第二十七節	.....	三五六
參考	.....	三六六



第廿八節 ..... 三六八  
 參 考 ..... 三七三  
 第廿九節 ..... 三七八  
 參 考 ..... 三八五  
 第三十節 ..... 三八六  
 參 考 ..... 三九五  
 第三十一節 ..... 三九六  
 參 考 ..... 四〇五

曹洞宗修證義說教大全目次終

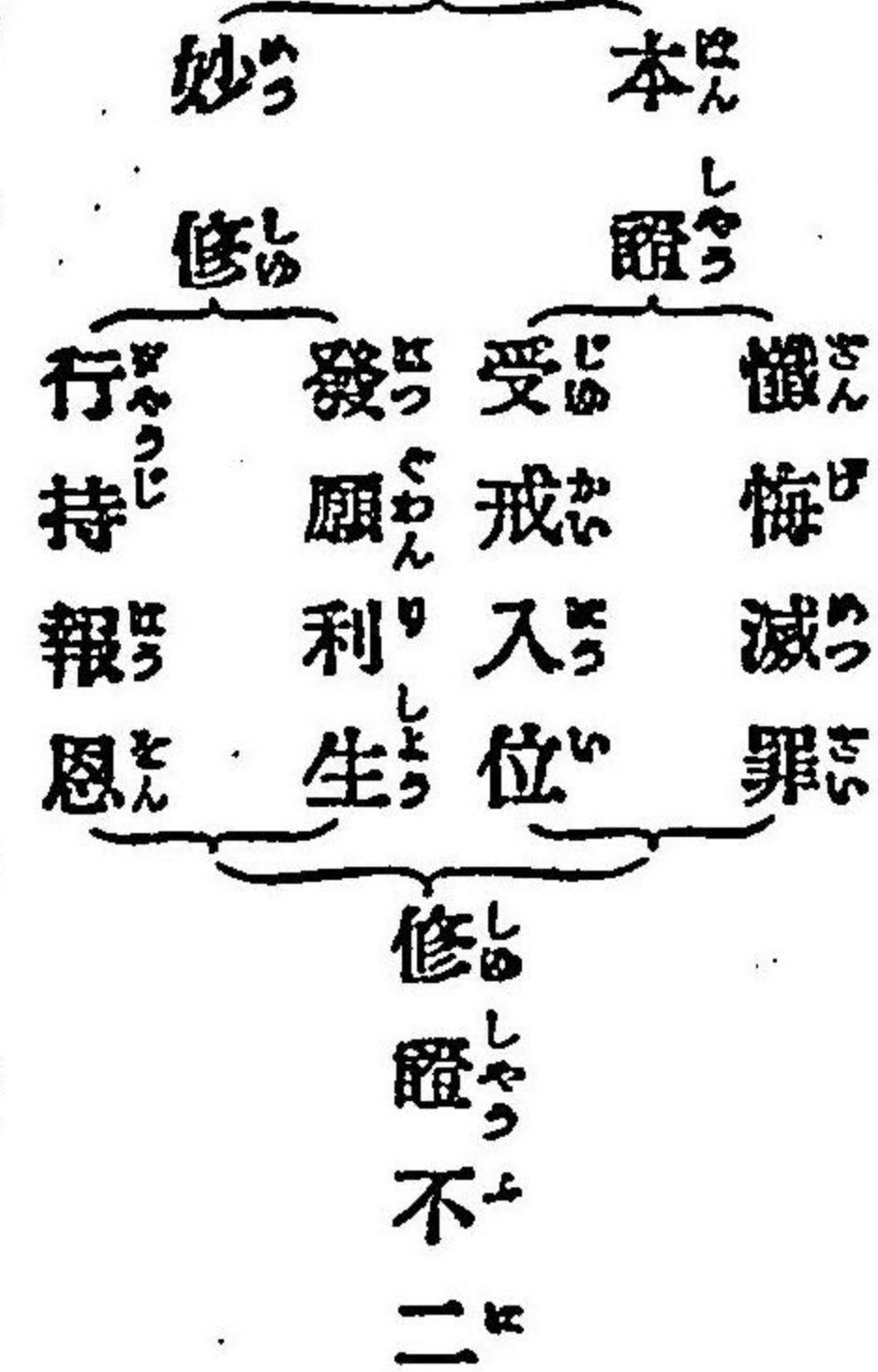
曹洞宗修證義說教大全

綱 要 (上)

此の修證義は全部五章三十一節三千七百零四字悉く皆高祖大師の金言て御座りますれば何れにおろかは御座りませんけれども其の五章の中で自づから願望が有り初めの一章即ち總序と申す分は佛敎總躰いづれの宗派に拘はらず皆な心得ねばならぬ大躰の所て御座りますれば敢て曹洞宗に限つたことでは無い其れゆゑ此の總序すなはち第一節から第六節までの間にはまだ曹洞宗の専門安心の味ひが少くない。ソコで今ま此のお話をするに就て初めから曹洞宗安心起行の大躰を能く飲込て置て其れから聞て貰ひ申さんと幾分か不安心の處がある。仍て先づ曹洞宗専門安心の大躰を初めに話いたして置きまじや



う。然しこれも今更事新らしく申すまでも無いこととて有りますが、一昧曹洞宗の安心起行と申すものは、圖に書いて見れば、



箇様な筋に成りますので、先づ第一に佛祖單傳の正法眼藏を、本證と妙修との二つに分けて之を曹洞宗の二大法門と致すこととて御座ります。一昧に佛教は何れの宗門から申しましても、其れくの修行を致して、其修行の功力次第に證果即ち悟りが開けると申すのが通則で御座ります。するに依て、宗旨の立て方に依ては、到底二世や三世の間に於て成佛するの開悟するのと云ふことは出来ぬものと明らかめ、無量劫の長い間

に生々世々の修行を盡して、サテ其後に始めて開悟成佛すると説く向もあることとて御座ります。が、我が曹洞宗に於る佛祖單傳の法に於ては、右様な事を申すのでは御座りません。唯右様な事を申さぬばかりでは無く、大方の諸宗の申す所とは丸て裏表で、諸宗では修行をしてから證ると申すのを、我が宗にては證つてから修行すると申すので御座ります。この處が大昧の上に於て他宗と大に違ふので御座ります。するから、最初から好く、この處を御得心に成らねば、切角修證義のお話を致す所詮が御座りません。尤も眞言宗や華嚴宗または眞宗なども、大昧右の昧裁に似て居ります。やうでは御座ります。れど、我が高祖の御教示は又格別な事で、直に本證妙修と示し遊ばされました。サテ其本證と申すは、モトよりサトルと云ふ意味で有て、凡そ一切衆生は別に修行を致さんでも、本來成佛と申して、モトくサトリの當昧そのまゝの現成で、何も面倒なことは無い。この道理を三祖大師は「信心銘」に



「至道無難」と仰せられて有る。至道と云ふは至極の大道と申すこと、無難と云ふは俗に申せばムツカシイ事は無いと申すほどの事で御座ります。又我が高祖は「坐禪儀」に於て、道本圓通、假修證と仰せられました。三祖のお詞と同じこととて、大道は本來そのまゝに圓滿通達して有て、別に修行だの證果だのと云ふ手数を掛けるには及ばんもので有るぞと。お示し下されたので有ります。果して然らば吾々一切衆生は此身このまゝの佛に違ひない筈であるのに、何故に自由無碍に働けぬので有るまじやふぞ。此身このまゝ佛であるとして見れば、餘りに粗末千萬なる佛が多くて、中には火附盜賊人殺、その身そのまゝ修羅である畜生である地獄であると云ふなら、成るほど其れに違ひ御座らぬと直にお請が出来るかも知らんが、此身このまゝ佛と云ふ一段に至つては如何にしても直に納得いたしかぬる有様で御座ります。其れ故に諸宗では餘程の修行を積まねば中々容易に佛に成れるものでは無いと言はるゝも。

誠に尤もの次第のやうに聞える。然りながら更に能く考がへて見れば、ソ一ては無いもと、立派な佛であるものをドウした一念の間違か、自から自分を卑しんで、餓鬼畜生の有様に陥入たので有ります。から、一念正氣に酬がへれば此身このまゝ佛に違ひない、この處を「法華經」にお譬をお引なされて有る。其れは或る長者の宅に一人息子が有り、ました所が、其の息子がドウした事の間違やら、フリと家出をして他國へ流浪して参りました。宅に居ればこそ長者の子息で有ります。けれども、浪人して他國へ参れば、乞食をするより外は御座りません。野宿をしたり、犬に吠付れたり、二日も三日も米一粒いたくことの出来ぬ日も有り、眼は凹み骨は露はれて、瘦衰ろへた有様、まことに氣の毒も情ないとも申しやうの無い姿で、處々方々流浪して、己れの親の宅とも知らず、長者の軒の下に立て、ドウぞ御助けなされて下さりませと、悲しい聲で歎くのを、親の長者が聞き付けて、ハテ今の聲は悴の聲によく似



て居るが家出をしてから幾年月戀しさ不便さに涙の乾く日間は無いに若しもやと思ふて窺いて見ると委形こそ顔れたれ我子に違ひないので有りますから長者の喜び言はん方なく嗚呼よくこそ還て来てくれた何はともあれ先づ早く宅へ上れと言つて親の長者は涙ながらに手を執りましたが乞食の息子は驚ろいたの驚ろかないのと云ふ話では無い肝を潰して氣絶したと云ふ騒ですナセ又其様に驚ろいたかと云ふに乞食子息は自分を眞の乞食であると思ふて居るに長者の主人に手を執られて我子よ能く還て来てくれたなどと言はれたから肝を潰したので有ります漸やく息は吹返したが中々自分が長者の一人子息であると思ふて承知しない親の長者は追々に取る年て一日も早く家督を譲りたいと思ふけれどもサテ致し方が無いに依て已むを得ず先づ其子息を下男に使ふと云ふことにして衣食を與へて再び遁げ出させぬだけの方便を廻らし追々に言ふて聞かせて自分は全く長

者の子で有つた此家の家督をすべき身分に違ひないと云ふことを得心させたとある此れが即ち諸宗の中で説く所の修行をして悟りを開くと云ふ順序の方で有りますが若し此子息が假令一旦は乞食に成て流浪したにもせよ時節因縁純熟して一念頓悟と夢のさめたやうに忽ち悟りが開けたなら苞かぶつたまゝでも腹の空たまゝでも其身そのまゝ長者の一人子息であると思ふことは合點が往かねば成らぬサテ又其合點の往た時に始めて長者の一人子息に成たのでは無いものと長者の一人子息で有つたと云ふことも分らねば成らぬ其れが即ち我が宗の本證の法門と申すもので御座ります然らば如何なる方法に依つて謂ゆる一念頓悟と夢のさめたやうに悟りを開かせることが出来るかと云ふに是れに就ては前の圖に示して置た懺悔滅罪と受戒入位と云ふことが必要になるので有りますが其れより先きにモ一つ妙修と云ふことのお話を致して其次に四大原則のお話に及び其上て三十



一節を追々に皆ち話いたすことと致しませうが、サテ本證の道理が分つて見れば此身此儘もとくからの佛であると云ふことに疑ひが無いはずで有りますが、此疑ひと云ふものは中々に晴れにくいもので有て、設ひ道理は其れに違ひないと知りながらも、知ただけでは眞實に其の通りの行ひが出来ないもので、御座ります尤も眞實に知りぬいたとてさへ有れば必らず其通りに行はれるに違ひないので、譬へば火は熱いものである火は焼くものであると云ふことを眞實に知りぬいて居る者は誰にドウ勸められたからと云ふても、火を手で握る氣にはならず、火を袂に入れる氣にもならぬ。テヨツと螢ほどの火が壘の上に落ちて、も其れ火箸を早く持てこい、何ぞ扱むものが無いかと云て騒ぐに違ひない。然るにまだ焼いとも焼くとも御存知ない赤ン坊は、ウツカリして居る間に火を攫んで火傷をする。然し一度熱い目にあふた後は線香の火を見ても泣いて恐ろしがる。是れが眞實に知りぬいたので有るから其

通り直に實地に行はれて往くので、今吾々が煩惱生死の凡夫では無い、本來清淨の佛であると云ふことも、火の熱いと云ふことを知たやうに、知りぬきさへすれば、自然に佛の行ひがあらはれるに違ひない。ソコで佛法は信を以て能入となすとも申し、又信は道元功德の母とも申して、信心を第一と致すことと有ります。信心と申すは疑ひの晴れた心のことで、即ち確かに知りぬいた所を申すので、少しも疑ひの念の掛つて居る間は眞實信心とは申さんので、御座ります。其れ故に吾々お互ひも眞實信心を起して一念も疑ふ所なく、此身此儘もとくからの佛である。長者の家の雇人ではない、全く長者の一人息子に違ひないと悟れたならば、誰が勧めないでも、他に教へられないでも、自然に妙修と云ふことが顯はれて來ねばならぬわけ有ります。サテ其妙修と申すことは、是れも最初に申した通り、外の宗旨では大抵先づ修行を致して其れから跡で其修行の功德次第に悟が開けると云ふので有りますが、我が曹



洞宗は其れと全く表裏で先づ本證の悟りを開いて其れから跡で修行をするので有りますから、外の宗旨の修行と別なことを知らせるために妙の字を冠せて妙修と申したもので有ります。妙と云ふことは不可思議に名くると申しまして、吾々凡夫の心にも詞にも及ばぬ所を妙と申すので有りますが、我が曹洞宗の修行は實に不可思議に違ひない。何かと云ふに本來成佛の證が開けた上に起る修行で有りますから、何時までも云ふ限りは無い。生々世々未來永劫はてしなく行なふて往く修行であるから、心も詞も及びません。何處までと云ふ限りは無い。十方法界塵々刹々はてしなく行なふて往く修行であるから、心も詞も及びません。前の長者の子息の譬で申しましたやうなら、己れがまだ長者の家督人と云ふことが分らんで、權助奉公に雇はれて居るのであるとばかり思ひ込んで居る間は、仕事の上に限りが有て、私の役目はコレだけで有る。何時までも此事をして仕舞へば其れで役目が済むと云ふやうな賊

に淺はかなことと有るけれども、一旦サテは長者の家督人此家の主である。と氣が附いて一念の疑ひなく眞實信心決定した上は、家内中の仕事は皆自分の仕事で、自分の仕ること爲すことが皆家内中の安危存亡の響いて往くことになるから、是れだけの事を何時までも仕て仕まへば、夫れて濟むと云ふやうなわけでは無い。雇人根性から考へて見れば實に心も詞も及ばぬ不可思議なことで、御座りませう。然し長者の家督と成た身の上では其れが其儘當然の事で、別段に異つた事でも無く、誰に勸られないでも自然に其れだけの事が行はれて往くに違ひない。一眸人間と申すものは形骸の上から見ますれば、富貴な人でも貧窮な人でも、恐れ入たことでは有るが、天子様でも吾々でも、五尺の形骸に左までの違ひは無いもので、丸臍にした見た所では案外な行違が出来る。かも知れん、去りながら徹頭徹尾違ふて居るのは、只その心の落着てある。丸臍に成ても富貴な人には富貴な人だけの心がある。何程美しく



着飾ても貧乏人の借着ては致しかたが無い況してや、一天萬乗の君の位に在します御一人の上に於せられては、卒士の濱も王土に非ずと云ふこと無く、天が下四海の内何處のはての牛うつ童柴刈る翁の事までも皆御心に掛けさせられ、雨が際りつくくと云ふに就けても日照がすると云ふに就けても、民百姓がドンなて有らう、熱いにつけ寒いにつけ下々の者はと思しめさぬ、日としては無い。七八年前の冬のことて有たが天子様の御詠みあそばされた御歌に、冬ふかみ寢屋の衾をかさねても思ふは民の夜寒なりけりと遊ばされたと承たまはる。皇后様もまた同じ御心で綾錦とりかさねても思ふかな寒さ掩はん袖もなき身をとあ詠みあそばされた九重の大奥に綾錦をお重ねあそばしながら、夜の寒さを掩ふべき袖も無い身の悲しさを思ひやれば、左まで暖たかには思しめさぬと仰せらるゝ此御心ばせ只一つが一天萬乗の君の御本分吾々臣民たるものが君の爲めには命を棄てても忠義を盡さねば成らぬ

所が此に在るのじや、幾ら一天萬乗の君と云ふても、日本國中津々浦々の事までも皆御自身で御世話あそばすと云ふわけには無い、幾ら四千萬人の大君であらせらるゝと云ふたからとて吾々下々の者の事までも御存知あらせらるゝわけには無い、都べての事は大臣次官その他それ々の役目の者にお打ち任せあそばした其儘で、御手をお下しあそばさるゝ所としては少しも無くとも、日本國中が御手の内、四千萬人を朝な夕なに摩て擦りして下さる道理、いかにも不可思議と申す外は無い、心も詞も及ぶことでは御座りませぬ、サテ此の道理が能く分つたなら、吾々互ひ此身此儘もとくからの佛である、最早や煩惱妄想の凡夫で無い、十方諸佛の仲間に入つた身じやと眞實信心疑ひ晴れたら、假令形骸は昨日に變らぬ百姓にもせよ、商人にもせよ、其商賣の其儘が最早や凡夫の仕事で無い、田植稻刈、鍛鎌取るまゝ、其れが佛の御仕事と成て來るのが、我が曹洞宗に於て本證の上の妙修と申すので、御座ります。コ



、の様子を釋迦如來は、今此三界皆是我有其中衆生悉是吾子と仰せられた。三千世界が其儘に皆如來様の御所有、其中に生けとし生ける一切衆生は悉く吾子であるぞと仰せられたので有りますが、三千世界が皆御有所て有て見れば、三千世界に有らゆる物事みな其儘に佛事佛物、一切衆生が悉く吾子て有たら、誰れが憎い孰れが可愛いと云ふ別け隔てのあらうはづは無い、皆悉く濟度して御自身と同じやうな佛の位に取立て、遣はさうと思しめす外は無、其れを佛の大慈悲と申すのじや。吾々も互ひ身不肖ながら最早や既に其御濟度に預かつて本來成佛と證れた上は、設ひ手足は叶はんでも心一つは佛の心と同等一致、今此三界皆是我有其中衆生悉是吾子の見識が立たねば成りませぬ、淨土眞宗などは、此娑婆ては迎も佛に成れぬと諦らめ、此世の命終つた後に極樂淨土へ往生して其れから佛に成ると教へる、其眞宗の教てさへ、親鸞上人の和讃には、有漏の穢身は變らねど心は淨土に住み遊ぶと言ふて

ある況んや娑婆を離れて外に淨土があるとは仰せられず、此娑婆世界に生ぜんところ願ひ來りつれ、釋迦牟尼佛を見たてまつることを喜ばざらめやと御教へ下さるゝ高祖大師の御流を汲み、佛祖正傳の佛戒を受けて、眞に是れ諸佛の御子なりと御證明を蒙むれる身が心一つを佛の心に通はせられぬと云ふことが何て有らうぞ、サ、其心が前に申した信心じや、信心決定さへすれば行ひは自づと顯はれて來と云ふとは先刻申した火は熱いと知りぬいた者が、ドウして火を握まふぞと云ふた譬喩と思ひ合せて御覽に成たら、大率妙修の有様はお呑込みに成りましたやう、サテ其妙修を發願利生と行持報恩の二つに分けた委しいお話は追々にまた席をかさねて……

網要 (下)

本證と妙修との大體が略お分りに成た上は、更に本證を顯はす方法と



して懺悔滅罪と受戒入位との二大原則を實行することが何より肝要  
サテ又本證が顯るれば必らず妙修の實行として發願利生と行持報恩  
との二大原則を朝な夕なの嗜みとせねば成らぬ然るに此四大原則の  
委しいことは即ち修證義三十二節に涉つて皆その事ばかりを説せら  
れたので御座りまれば其の言葉の節々に就いて追て委しくお話し  
すこととて有りまするが今こゝでザツと其大略をお話まをして置くの  
も亦た後の便利になることが多かるうかと思ひますれば荒々御相談  
に及びましやうが、一股本證と申すことは前々委しくお話しした通  
り我々も互ひ一切衆生が皆本々からの佛である。此身此儘悟りの境界  
であること云ふことを一點の疑ひなく合點するまでのこととて、其合點の  
往た後は自づから其道理のまゝが朝な夕なの行ひに顯はるゝを妙修  
と名くるだけの事でありまするから其本證妙修さへ眞實に顯はれて行  
はるれば其他の事はドウでも好いので必ず四大原則とか授戒發願と

か云ふことに限ると云ふわけでは無い念佛でもよければ題目でもよし  
眞言でもよければ陀羅尼でもよし其んなことに擇り嫌ひは無いので  
有りますけれども、ソコが宗旨の分れる所で祖師方のお考へ次第によ  
り念佛に限ると極めたのが淨土宗や眞宗の安心題目の外は無いと定  
めたのが日蓮宗、眞言陀羅尼で無ければ佛に成れぬと云ふのが眞言宗、  
三祇百大劫の長い間生れかはり死かはり修行に修行を積だ後で無け  
れば成佛することかなはぬと諦らめたのが法相宗、其外いろくの宗  
旨があれど、我が宗祖承陽大師が遙々宋國へお渡りなされて釋迦如來  
から嫡々相承、諸宗各派の總本家とも云ふべき御傳法あらせられたの  
は念佛でも無く題目でも無く眞言陀羅尼でも無い、佛祖正傳の菩薩大  
戒と申して、釋迦如來から迦葉尊者へ、迦葉尊者から阿難陀尊者、其れか  
ら商那和修尊者、優婆塞多尊者と、段々傳はつて二十八代目が達磨大師  
であります、が達磨大師は天竺の御化導畢らせられた後に支那へお出



なさせられて、二祖正宗普覺大師へ其法を傳へなされ、其れから十一代目が洞山悟本大師と申して、此方（このかた）の時から曹洞宗と云ふ宗名が付き、又十三代傳はつて天童山の如淨禪師と申すのが、即ち宗祖承陽大師のお師匠であらせらるゝから、承陽大師は正しく釋迦如來から五十一代目の嫡孫（ちやくそん）として、系圖（けいず）正しく我日本へお弘（ひろ）めに成たのが、即ち菩薩大戒とも申し、又は佛戒とも禪戒とも申すので、我々互（たが）ひが直に本源（ほんげん）を顯はして佛の悟りを其儘に朝な夕な（あさなゆふな）の行ひに顯はして、往くことの出來る本源（ほんげん）であり、其れ故に我宗（わししゅう）では念佛（ねんぶつ）をせとも勸めず、題目（だいもく）となへよとも勸めはせぬ、唯（ただ）いそいで受戒（じゆかい）せよとのみ勸むるので、受戒（じゆかい）さへ爲れば此身（このみ）此儘（このまま）もはや昔（むかし）の凡夫（ぼんぷ）では無（な）い、衆生（しゆじやう）佛戒（ぶつがい）を受れば諸佛（しよぶつ）の位に入る位大覺（だいげつ）に同（おな）じ、已（ま）る眞（まこと）に是れ諸佛（しよぶつ）の子（こ）なり」と申して、直に大覺（だいげつ）の佛の位（ゐ）に上（あ）るので有（あ）ります、ソノ所（ところ）を受戒（じゆかい）入位（にゅうゐ）と申したので、受戒（じゆかい）入位（にゅうゐ）と云ふ文字（もんじ）は戒（がい）を受けて位（ゐ）に入（い）ると訓（し）む文字（もんじ）ですが、其（その）戒（がい）と云ふ

たが菩薩大戒（ぼさだがい）その位（ゐ）と云ふたが佛の位受戒（ぶつゐじゆかい）一つて三世諸佛（さんぜしよぶつ）と同じ位（ゐ）に上（あ）ると云ふのが、曹洞宗（そうどうしゅう）の佛祖（ぶつそ）正傳（しやうでん）嫡々（ちやくしやくしやく）相承（さうじやう）他宗（たしゅう）他門（たもん）に類（たぐひ）の無（な）い安心（あんしん）決定（けつじやう）の基（もと）であり、就（つ）ては已（ま）に受戒（じゆかい）の濟（す）だ人は申（ま）すまでも無（な）いが、未（ま）だ受戒（じゆかい）の濟（す）まぬ人は片時（ぺんじ）も急（いそ）いで受戒（じゆかい）するの（が）何（なに）より肝要（かんよう）で御座（ござ）ります、然（しか）るに其（その）受戒（じゆかい）をするに就（つ）ては、其（その）前に懺悔（ざんげ）と云ふことを行（な）なふの（が）必要（ひつやう）で、懺悔（ざんげ）せんでは受戒（じゆかい）は出來（こ）ぬ、懺悔（ざんげ）と云ふは天竺（てんしゆく）の詞（ことば）で、懺摩（ざんま）と云ふのを漢語（かんご）に翻譯（へんじやく）すれば悔過（けいこ）と云ふことになり、更に日本（にっぽん）の詞（ことば）に直（ただ）せばツミトガをクエアラタメルと云ふ意味（いみ）になり、更に昔（むかし）から天竺（てんしゆく）の詞（ことば）懺摩（ざんま）の懺（ざん）の字（じ）と漢語（かんご）の悔過（けいこ）の悔（け）の字（じ）とを一緒（いっしょ）に合（あ）せて懺悔（ざんげ）と申（ま）すの（が）慣習（かんじやく）に成（な）り居（ゐ）りますが、約（やく）る所（ところ）はツミトガをクエアラタメルと云ふ意味（いみ）より外（ほか）に何（なに）も深い道理（だうり）は無（な）い、ツミトガをクエアラタメルと云ふことは、嗚呼（ああ）これまでは惡（わる）かつた心得（こころえ）違（ちが）ひをして居（ゐ）る有（あ）らと思（おも）ふ心の起（おこ）るので、前（まへ）に屢々（るる）お話（はなし）いたした長者（ちやうじや）の子息（こしやく）が漂々（ひょうひょう）と親（おや）の



家を脱走して、長い間他國に流浪し、乞食非人と成りはて、遂には己れが生れ落た長者の家へ戻つて來ながら、親の詞を誠と思はず、ドコまでも乞食非人と自から卑しみ、長者の家督を相續して親の長者に孝行つくす氣にならぬと云ふは、生々世々の宿業とは申しながら、淺ましいとも情ないとも申しやうのない罪過では御座りませぬか、然るに一念ひるがへつて、嗚呼今までは心得違て有た、親の長者の言はるゝ通り、長者の家督に生れた身じやと訖と心を入れかへる、其れが即ち懺悔であります。我々も互ひ無始劫來六道四生に流浪して、本來成佛の尊き身を、地獄や餓鬼の苦に沈め、邂逅人間に生れて來ても、今が今まで地獄や餓鬼の種を造らぬ日としては無く、又しても冥より冥に入つて、出離の縁に漏れやうとする所を、佛祖深重のお慈悲に依て、漸やく佛祖正傳の菩薩大戒を受得らるゝ身と成たのでありますから、嗚呼これまでは悪かつた心得違てありましたと、眞實まことの心から一言おわびを申さんては

何と佛々祖々に對して相濟まんては御座りませぬか、譬へば先祖傳來の寶物の皿がある、然るに今が今までも其れとは知らず、臺所で猫の椀に使ふて居たが、年寄た人たちに言ひ聞せられて、是れはお家の寶物ぞ、尊客珍客の饗應に山海の珍味を盛るものぞと、心附たら其皿をドウなさる、何はさて措き早速に鹽磨きにして洗ひすますが、第一急務で有りましたしやう、今も丁度その通り、最早凡夫の仲間を離れ三世諸佛のお位に仲間入をする身に成るには、嗚呼今までは悪るかつたと、一念發起の清水で無始劫來の塵垢を洗ひ落すが懺悔であるから、滅罪と云ふ二字が添えてある、滅はホロボス罪はツミで、俗に申せば罪滅ぼしと申すことです。然るに懺悔の儀式に依て有りと有らゆる罪過が滅びて見れば、其れと同時に同入覺位の戒體が顯はれて來る。譬へば鏡に塵垢の積つたやうなもの、其塵垢さへ取り除けば、自然に本々の光が出て、花も紅葉も明らかに映る。今も其れと少しも違はず、嗚呼これまでは悪るかつた



と思ふ心は知らずくにモ一是れからは悪いことは決して爲まいと思ふ心じや其是れからは決して悪いことを爲ぬと思ふ心が取も直さず佛祖正傳の戒法じや其れを嫡々相承の儀式に掛けて授ける受ける其れが即ち受戒入位じや何も格別むづかしいことでは無い唯正直に佛祖の教を戒師または教授師のお取次なざる通りに信仰して一點疑惑を掛けさへせねば知らずく道理に契ひ自然に妙修が顯はれる誠に不思議なもので有ります其様子は修證義の全篇に涉つて宗祖大師の御示しが苦口叮嚀に嚙て含めて呑み込ませて下さるのでありますから席を重ねてお聞きになれば追々お分りになりましやうさて本證の二大原則たる懺悔滅罪と受戒入位との大意が畧お分りになれば其次は妙修の二大原則たる發願利生と行持報恩との大意をお呑込になるのが何より肝要て御座ります一鉢妙修と申すことは本證の上から自然に顯はれて來るもので有りますから本證の實體たる菩薩大戒の

性質に於て此妙修を生み出す種子は何て有るかと思ふことをお話し申して置くのが肝要て有りますサテ其菩薩大戒と申すは釋迦如來が『梵網菩薩戒經』と申すお經の上にお説きなされたので都て五十八箇條ありますが其中で四十八戒は輕垢罪と申して輕い罪のお誡めてありますから佛祖正傳の儀式に掛けて相傳は致されません他の十箇條だけが十重禁戒と申して重い罪のお誡めて天台宗の顯戒と申すのも淨土宗の圓頓戒と申すのも皆この十戒の事てあります他宗にはドウ云ふ相傳が有るかには知らんが我が曹洞宗に於ては前にも申した通り釋迦如來から宗祖大師まで五十一代それから今日の諸老宿に至るまで何れも系圖正しく傳授し來られたので實に我宗の安心起行は唯此十重禁戒の外は無いのであります然るに此十重禁戒は悉く常住佛性の慈悲心孝順心と云ふことが其戒體と成てあるので一箇條毎に皆この常住佛性の慈悲心孝順心と云ふお詞を本になさらぬのは無いので



有ります然らば此の詞は如何なることかと云ふに常住と云ふはツチ  
にトママルと讀む宇で何時でも變らぬと申すこと佛性と云ふはホト  
ケのウマレツキと云ふことと有りますから眞實常住なるものは佛性  
の外になく佛性は必ず眞實常住なるもので有ります然るに其眞實  
常住なる佛性と云ふは如何なるもので有るかと云ふに慈悲心と孝順  
心との二つの心と成て顯れて來るので有ります慈悲心と云ふは物を  
感む心もろくの生けとし生けるもの皆悉く救ふて遣はしたいと願  
ふ心の事で其れを我が宗の修證義には發願利生と申されたので有  
りますサテ又孝順心と云ふは孝は親や師匠に孝行すること順は凡そ己  
れより目上の人に隨順と申してシタガヒソムカヌ心、それを今我が宗  
の修證義には行持報恩と示させられたので有ります凡そ菩薩大戒は  
十箇條に説かせられて不殺生不偷盜不妄語不邪淫と云ふやうに委し  
くお誠めなされて有るけれども其精神とする所を約めて見れば慈悲

心と孝順心との二つの外は無い然るに吾々互ひ己に其慈悲心の本  
體とする大戒を受たからには必ず發願利生せんければならぬ已に其  
孝順心を本體とする大戒を受たからには必ず行持報恩せんければな  
らぬ此二つの道の具はつたのが謂ゆる妙修と申すので有ります發願  
利生と申すことは願を發して生を利ふと讀むので有りますが其發願  
に通願と別願との二つが有る通願と云ふは凡そ菩薩戒を受けたもの  
は誰でも普通に發す所の願で四弘誓願と申すことが有る四弘誓願と  
云ふは四通りの弘く誓ひたる願と云ふことと三世の諸佛も十方の菩  
薩も皆この願をお發しなさらぬ方は無い一には衆生無邊誓願度と申  
して凡そ生とし生るものは皆濟度して遣はしたいと誓願する二には  
煩惱無盡誓願斷と申して一切衆生を濟度する爲めに自分も他人も諸  
共に八萬四千の煩惱を悉く斷除かねばならぬ三には法門無量誓願學  
と申して多くの煩惱を除く爲めには亦た多くの法門を學ばねばなら



ぬ。ソコで四には佛道無上誓願成と申して前の三つが満足したのが直に無上の佛道を成就したので有ります。此四通りの願は誰でも發さねばならぬに依て是は通願サテ別願と云ふは四通りの通願の外に諸佛菩薩が各自別段にお立なされた願がある。釋迦如來の五百の大願阿彌陀如來の四十八願藥師如來の十二願などと申す類て菩薩方にも觀音は觀音地藏は地藏皆それぞれの別願がある。現に天台宗とか眞言宗とか淨土宗とか日蓮宗とか色々な宗旨などの分れて居るのも其本は皆其宗祖にお成りなされた傳教大師、弘法大師、圓光大師、日蓮上人などの別願の違ふ所から分れたもので有ります。去りながら約まる所は一切衆生に利益を興へたいと云ふより外は無。ソコで我が修證義には之を約めて發願利生の四字でも示しなされてある。結局常住佛性の慈悲心が朝な夕なに行ひの上に顯はれて出るので有りますから、何事を思ふに付けても、何事を言ふに付けても、又何事を爲るに付けても、身口意

の三業みな慈悲心の顯はれと成て來るのが懺悔受戒の力に依て本證の悟りの開けた何よりの印で、此身このまゝ佛であると言ふの證據は此外に無いので有ります。次に孝順心が行持報恩と顯れて來ると云ふことは前にも申した如く、孝は孝行順は隨順て皆已れより目上の方に事へることとて有りますから、之を報恩と申したので有ります。報恩と云ふは親にもせよ君にもせよ都て御恩を受けたお方に向つて其御恩返しをするにとて有りますが、佛法では凡そ恩と云ふとを四つに纏めて四恩と申します。四恩と云ふは、一には父母の恩、二には國王の恩と申して、天皇陛下の御恩、三には衆生の恩と申して、凡そ生けとし生ける者に皆恩があると教えられる、四には三寶の恩と申して、佛と法と僧との恩、此四恩の事は後に本文の上で亦た委しくお話いたしますが、トニカク是等の恩返しをするに就て諸宗の祖師の教え方に色々の説もありまして、やうが我が宗祖大師の御教は凡そ報恩は行持の外は無いと仰せら



る、行持と云ふは行はオコナロ持はタモツと云ふ字で、吾人各々其身分相應に行ふべきことを必らず行ひ持つべきことを必らず持つ其れが直に報恩であるぞよとの教であり、外に何も六加しいことは無い。官員は官員の行ふべき持つべき所がある、其れを其の儘に行ひ持つば其れが直に四恩報謝で、君も親も佛も喜びあそばされ、一切衆生も皆其利益を蒙むることになる。商人には商人の行ひ持つべき道があり、農民には農民の行ひ持つべき筋がある、其行ひ持つべき筋道を其儘に行ひ持ちさへすれば親には孝行、君には忠義、三寶の供養衆生の利益みな其中にこもつてある。若し之と反對で、各々身分相應に行ひ持つべきことを行ひ持たぬと云ふことに成ては、身も修まらず家も齊はず國も治まらず、天下の大亂も皆これから起る。眼を開いて四方を見れば、山は山らしく高く聳え、川は川らしく清く流れる。春になれば花が咲き、秋になれば紅葉が散る。鴉は必らずカー／＼と鳴き、雀は必らずチウチウ

と鳴く、皆其行ふべきを行ふて皆其持つべきを持つ有様了了として、味ます所は無、然るに吾々人間に在てのみ、輒もすれば其行ふべきを行はず、其持つべきを持たず却て其行ふべからざることを行ひ、其持つべからざることを持つものさへ多き有様、ソレて何が萬物の靈長と言はれましやうぞ。幸ひに佛祖深重のお慈悲にあひたてまつることを得たる所詮には、片時も早く懺悔滅罪し、受戒入位の身となつて、發願行持の利生報恩、セメては一日一夜なりとも人と生れた甲斐が有たら、生々世々の最大幸福これに増したる喜びは、決して外に有るべきでは御座りません。





第壹章 總序

第一節

生を明らめ死を明らむるは、佛家一大事の因縁なり。生死の中、佛あれば生死なし、但生死即ち涅槃と心得て、生死と厭ふべきもなく、涅槃として欣ふべきもなし。是時初めて生死を離るゝ分あり。唯一大事因縁と究

これに修證義を五段に分けられたる中、第一の總序の最初に示されたる即ち第一節の御文であり、先づ曹洞宗の安心を總括して御願はし下された尤も大切な御文であり、サツと御文の相を申して見れば、佛教を信仰する者の一番大切な事は、死ぬると云ふことの上、に就てたしかに明らめ付くのが、より要であるぞよとの意味が、第一句の生を明らめ死を明らむるは、佛

家一大事の因縁なりとある御言葉、サテ其生る死ぬるの生死と云ふことは、吾等凡夫の迷の有様之に引かへて佛のお悟りは涅槃と申して、生る死るの迷を除き安穩快樂の境界であらせらるゝと思ふのが、大方凡夫から佛を見あげた時の考へてあるけれども、元來佛も我も其本に然までの違ひのあるわけ、無ければ吾々凡夫の惜い可愛い惜い欲いと朝な夕なに働いて居る煩惱生死の其中に、涅槃寂靜の佛の心さへあれば、其れが直に佛である涅槃である。別に生死の煩惱のと云ふて厭ひ嫌ふべき者は無いぞよと示しなされたのが、即ち生死の中に佛あれば生死なしと仰せられた御文。されば、但生死即ち涅槃と心得て生死として厭ふべきもなく、涅槃として欣ふべきもなしとさへ明らめが付けば、其れが其まゝ生死を離れたので、此身このまゝ佛の涅槃を得たのであるぞよと云ふお意を、是時初めて生死を離るゝ分ありと示させられた。一、生死すなはち生る死ると云ふことは、吾々人間の命の有様じや、又涅槃



と云ふことは佛の命の有様じや佛の命の涅槃の上には死るの生ると云ふことが無いに依て久遠とも無量とも申して何時から何時までと云ふ限りは無い然るに吾々凡夫の生死の命は人生七十古來稀なりなど申して幾ら長生しても百になる人はメツタに無い設ひ百が二百に成て見ても遅いか早いか死なねばならぬソコで死だ後の未來はドウ有らうぞ生れぬ前の過去はドウて有たやら此世の様から考へても後生の程が案じられると云ふことになるソコで佛の涅槃と凡夫の生死と雲泥とも月と露とも譬へやうの無い違ひがあるやうに思はれるが其れは吾々凡夫が己れと己れの身を限り我と我が命を限つて五尺の形骸五十年の命と自から小さく短かくしたから淺ましい凡夫となりさがつたのじや然るに今佛祖正傳の受戒をして佛の血脈を戴いた上からは五十年が三十年でも乃至六つや七つて死なつても其身其儘三世諸佛と同體一味の涅槃の命を未來永劫失なふと云ふこと

は無い譬へて見やうならば佛の涅槃は太陽の光のやうなもの吾々の生死は今日と明かし翌日と暮すやうなものじや昨日である今日である夜である晝であると限りを附けて見れば日の長い春もあれば夜の長い秋もあり曇る日もあれば照る日もある丁度吾々が無始劫來生々世々に六道に輪廻し天上へ生れたこともあれば地獄へ落たことも有り花の盛りに天死したこともあれば百まで長命したことも有たらうが涅槃の命は少しも變つたことは無く太陽の光が無始劫來未來永劫の末までも照し透しに照して居るやうなもの昨日の今日の今日のと云ふは吾々の手前で云ふだけのこととて太陽の手前には夜晝も無いソコの道理が分つたなら今日翌日と明し暮すまゝ夜晝と變る其まゝに皆太陽の光であると云ふことが悟れねばならぬ譬今も全たく其れと同じことで生れかけり死かけりする其まゝが直に涅槃の不生不滅じやソウ悟れて見



れば別段に涅槃じゃからとて欣ぶべきでも無く生死じゃからとて別段に厭ふべきでも無いトは云ふもの、昨日は昨日、今日は今日、春には春の仕事があり、秋には秋の用意がある、夜が明ければ起き、日が暮れば眠る、其れが其まゝ、太陽の光の中の作用ぞと云ふことは、口では言へても身に心にはヒタリと行ひ得ることは六かしい、况んや常の口癖にも命あつての物種とはかり言ふてゐるものが、死る生るを其のまゝに常住涅槃と心得ることは、中々容易の事では無い、ソコで唯一大事と究盡すべしと示させられて有る釋迦如來の六年端坐も、達摩大師の九年面壁も、高祖大師が千萬里の波濤を踰えて宋國にお渡りなされ、如淨禪師の手殿しい御化導お受けなされたも、昔この生死を明らめることが、何より一番大切な事であるから起つたのじゃ、昔し楠正成公は愈打死と云ふ前日に明極楚俊禪師をお尋ねになり、血刀片手に引提たまゝて、生死交謝の時如

何とお問ひ成された。生死は謂ゆる生る死るの二つ。交謝は入替ると云ふ程のことであるから、正成只今生と死の入替る時で御座るが、如何やうに心得て宜しう御座りましやうかとお問ひ申しあげられたので有ます。明極禪師はサスガ後醍醐天皇の御師、依僧で、佛日焰慧禪師と謚號を賜はつた程なたしかな高僧で在らせられるから、直にお聲を勵まして、兩頭但に截断して一劍天に倚て寒しとお答へなされた。兩頭はフタツのカシラと訓む、生と死との二つじや、但に截断すると云ふは皆斬て仕舞へと仰せられた。サテ其生も死も斬捨てた刀をばドウするかと云ふに、一劍天に倚て寒しとある、一劍はヒトツのツルギ、天に倚て寒しと云ふは手の放れた有様じや、生死を生死と思はぬが、兩頭を截断したので有るが、其生死を生死と思はぬと云ふ、其心もまた殘つて居てはならぬといふので、禪師は勢をこめて一喝を下されたところが、正成公は通身に汗が流



れた、こゝが謂ゆる生死の厭ふべきも無く涅槃の欣ふべきも無し  
 の味ひじや。そうすると明極禪師は「汝徹せりと仰せられて證明を  
 せられた。正成公は茲に生死の大關を透りぬけて大安心の地に至  
 られたから、佛殿に入つて参拜して出て、翌日野戰十五度に及び、遂  
 に無爲庵に入つて舍弟正季及び麾下の士卒五十餘名とともに坐を  
 列ねて切腹せられたが、實に建武三年五月廿五日の事でありませ  
 う。又彼の有名な元の寇が九州の筑紫を襲ひ來たとき、北條時宗が討  
 手に向はんと、軍裝束して出立の時、佛光國師を尋ねて、大事到來せ  
 り如何が用心せん」と問ふた、これは元の寇が攻めて來たのである  
 から、實に吾が日本國が生死の一大事の時、時宗にとつても一大事  
 である。斯る一大事の到來したのであるが、どう用心したものであ  
 らふかとの問ひ。スルト佛光國師は嘗て未だ支那に居られた時、明  
 兵の爲めに捕はれて既に斬られんとする折柄、乾坤地の孤筈を卓

する無し、且喜すらくは人空法も亦空なることを、珍重す大元三尺  
 の劍、電光影裏に春風を斬るといふ一詩を吟ぜられたによつて、明  
 兵もその威徳に感じて殺さなんだといふほどの高僧であるから、  
 葛直に進前せよと答へられた。これは自分の生死國家の勝敗とい  
 ふやうな考が胸中にあつたぶんには、マサカの時には氣後がして、  
 必勝といふことは得られぬから、生死勝敗といふやうな側目をふ  
 らずに、眞一文字に突き進んでゆけといふ意、時宗も絶代の英傑だ  
 から、威を震ふて一喝した、即ち合點でござる、眞ッこの通に生死勝  
 敗の兩頭を截斷して進まんといふ意氣込であつたから、佛光國師  
 も眞の獅子見能く哮吼すといはれた、これは眞正の獅子の見はう  
 まく吼えるといふ證明じや、かくて時宗は國師に御禮の拜をして  
 出立したが、果して能く元兵を彼の如く打滅して國威を海外に輝  
 かしたのである。これが矢張生死として厭ふべきもなく、涅槃とし



て欣ぶべきもなしといふ境界になれたからである。又太田道灌といふは其の昔し江戸城を開いた名高い人でありすが、智勇人に勝れ武藝に達し和歌も巧みに出来、ことに佛法を信じて、龍穩寺の泰叟和尚に参じたり、又雲崗和尚といふを萬年山に請して法益を受けられた。然るに此の時山内顯定扇谷定正の二人が關東を管領し居たので世に之を兩上杉と申して居ましたが、道灌は定正を補佐して居まして、萬事政治の仕方がよいから、自然に定正の評判がよろしい處より、顯定は大いに之を忌んで居ました。スルト丁度その時定正の麾下に謀叛をした者がありましたので、顯定の方より定正に讒言をして、此の謀叛は全く太田が張本であるから御用心あるがよろしいと申しました。その時定正は相州糟谷に居ましたが、道灌はかくとも知らずに糟谷に行つて定正に面謁をした。定正は豫ねて人を以て道灌の左右を窺はせ置き、道灌が浴室に這入た

とき、四方より槍を突きつけ、ヤア道灌入道常より和歌を嗜んで居るが、只今はドウじやと云はせました。大抵の人ならば和歌どころではない、震ひあがつて仕舞ふのであるが、流石は豫て修行の積んで居る道灌少しも驚がず、斯かる時こそ命の惜しからぬ豫ねて無き身と思ひしらずばといふ一首を詠んで、悠々として刃を受け、て死んだといふ。正成公といひ時宗といひ道灌といひ何れも生死の一大事を明らめて居たから、斯る場合に臨んで能くとりさばきが出来て、萬世に大功を顯はし英名を傳へたのじや、然しこの人々達は古今の英傑であるから、かやうに生死透脱も出来やうが、吾々の様な者がドウして參禪辨道をして悟りを開くことが出来やうぞと云ふ方もあらふが、ソウでない。古人は斯くまでに命がけに坐禪工夫もなされたものを、今は佛祖の教のまゝに信心こらして受戒をすれば、萬善具足の佛戒であるから、自づから生死も無ければ



涅槃もない、ソレが即ち生死の中に佛あれば生死なしと御示し下されたと謂れじや、生死の中に佛あればとある佛の字を佛戒と見れば早や分りがする。佛戒さへ受ければ諸佛の位じやほどに生死のあるべきやうは無、其上は發願行持の利生報恩寢ても起きても佛戒光明の作用が慈悲心孝順心とあらはれて出る、ソコヲ始めて此身此儘の佛である、修證不二の境界である。

○参考

- 諸佛世尊は唯だ一大事因縁の爲めに世に出現せり。(法華品經)
- 始めて識る衆生本來成佛なることを生死涅槃は猶ほ昨夢のごとし(圓覺經)
- 佛心豈に他あらんや、正覺世間を覺る。(華嚴經)
- この生死は則ち佛の御いのちなり、之を厭ひ捨んとすれば則ち佛の

御命を失はんとするなり。(正法眼藏)

○ 佛と成るに最と易き道あり、諸の惡を作らず、生死に着する心なく、一切衆生の爲めにあはれみ深くして、上を敬ひ下も愛み、萬づを厭ふ心なく、欣ふ心なく、心に思ふことなく憂ふることもなき、是を佛と名く、復外に尋ねること莫れ。(正法眼藏)

○ 生死は除くべき法ぞとおもへるは佛法を厭ふ罪となる、豈に慎まざらんや、知るべし、佛法に心性大總相門の法門といふは、一大法界をこめて性相をわかず、生滅をいふことなし、菩提涅槃に及ぶまで心性に非るなし、一切諸法萬象森羅ともに唯是一心にして、籠め包ねざることなし。(正法眼藏)

○ いとはじなもとより空にすむ月は  
まばしべだて、雲かゝるとも  
(夢想國師)



○雲よりもたかきところに出て見よ

(全)

まばしも月にへだてありとや

○いつくより生れくるとも無きものを

(全)

かへるべき身と何なけくらん

第二節

人身得ること難し、佛法値ふこと希れなり。今我等宿善の助くるに依りて、已に受け難き人身を受けたるのみに非ず、遇ひ難き佛法に値ひ奉れり。生死の中の善生最勝の生なるべし。最勝の善身を徒らにして、露命を無常の風に任すること勿れ。

是れは修證義の第二節に示し下された高祖大師の御教訓じや。文字の数が百と二字あるが、其御文章が自づから四つに分れる。初に「人身得ること難し佛法値ふこと希れなり」とある二句十八字は、凡そ生けとし生ける物の多き中に人間の身に生れることは容易に得がたい又同じ人間に生れても世界に宗教多き中に佛の御教に値ひたてまつることは並大抵なことでは無いぞと仰せらるゝ。實に我々衆生の死かはり生れかはりする所は六道と申して天上



人間修羅餓鬼畜生地獄の六箇所その中で餓鬼と畜生と地獄との三つを三惡道と曰ひ之に修羅を加ふれば四惡趣と申して我々衆生が無始劫來幾度か浮んだり沈んだりして來たことて有らうけれども人間や天上に生れると云ふことは中々容易に出来ることでは無い昔し釋迦如來が指の爪の上に土を少しばかり御載なされて阿難尊者にお見せなされ阿難よ此爪の上の土と世界中の大地の土と孰れが多いぞと問ひあそばされた阿難尊者は其れは申し上るまでも無い大地の土が幾ら多いとも申しやうは御座りませんと答へ申しあげられたソコで釋迦如來が仰せられたるには阿難よく承まわれ凡そ生とし生ける者の中で人間の身に生れ出る果報の者は此爪の上の土の如く誠に少なく餓鬼や畜生の四惡趣に生れる者は大地の土よりも多いぞよと御教訓あそばされたとあるサテ又世の中には色々な宗教が澤山あつて釋迦如

來の御出世の前から天竺には婆羅門教と云ふが行はれ又天竺より少し西の方へ往けば猶太教と云ふが有り其れから耶蘇教だの回々教だのと云ふ教法も殖えて來た然し何れも皆眞實の道では無い耶蘇教などは天上へさへ生るれば其れで此上も無いことの様に思ふものと見えるが佛法では其天上も未だ六凡のうちで煩惱生死は免がれぬと説かせられてあるソコで天上の上に聲聞縁覺菩薩佛陀の四聖と申して段々悟りが氣高くなり佛陀の慈悲智慧が備はるのが佛法の目的て有るから外の教法とは最初より程度が違ふて居る其れゆゑ同じ人間に生れて來ても斯る無上の妙道に遭ひたてまつることは盲龜の浮木に値ふが如くてあると申すことじや盲龜と云ふは目の見えぬ龜と云ふことであるが目が無いのでは無けれども腹の下に唯た一つ目が有るので仰向にならなくては上を見ることが出来ぬ然るに海の中を何程泳いで歩い



ても波の上では仰向に成ることが出来ぬが偶々穴の明た木が浮  
 て流れて来たソコで龜は其浮木に取付て穴のところへ目を當て  
 てヤツと物を見ることが出来たと云ふ是れは『涅槃經』に説きな  
 された譬喩であるが我々衆生が生々世々六道四生に浮きつ沈  
 みつ生死の大海に漂ふて来たものが偶々佛の御教に遭ひたてま  
 つることは實に此譬の通りに違ひは無い然るに今我等宿善の  
 助くるに依りて已に受け難き人身を受けたるのみに非ず遭ひ難  
 き佛法に値ひたてまつれりと是れは已に我々が人間に生れて來  
 たのみでは無く斯る尊き佛祖正傳の大戒を受け得る身の上にな  
 へ成りあふせたる果報の目出たさを示させられたア、此果報は  
 ドウして得たぞ宿善の助くるに依りてとある宿善と云ふは前の  
 世の善い因縁と申すことじや委しく申さば宿と云ふ字はヤドと  
 訓む字でトマルと云ふ意味になるトマルと云ふは昨夕から今朝

まで夜を明かすことと有るが其明かす夜が無明長夜と申して前  
 の世から此世へ遷つて来たことを旅人が宿屋から宿屋へうつる  
 ことに喩へて示させられたサテ其前の世の宿屋に泊つて居たと  
 きに蒔て置た功德善根の種が此世に生て來て斯る目出たき人間  
 に生れ此上も無き佛戒をも受けたてまつることに成たので有る  
 ぞよと仰せらるゝのじやサテ其前の世の善根功德と云ふも多  
 有らうけれども先づ生を人間に受くる正因は五戒を持つた功德  
 に依ると申すことじや其れも中々一世や二世の因縁では有るま  
 いにヤレ／＼嬉しいことと有たと分つて見れば生死の中の善生  
 最勝の生なるべしと喜ばねばならぬ此一句十五字は嬉しさを示  
 させられた生死の中と云ふは無始劫來生れかはり死かはりした  
 中と申すこと善生とはヨキウマレと訓むので此たび程に結構  
 な身に生れたことは無いぞとのお詞また最勝と云ふはモットモ



スケレルと云ふ字で此上も無いと申す意味實に本師釋尊は我々衆生を濟度したまはんが爲にとて、娑婆往來八千返あそばされたと承けたまはる其八千返の御往來に我等は親しく御化導を受けたてまつつたことは一度も無く生々世々の間仕ること爲すこと修羅畜生の因でなければ餓鬼か地獄の業ばかり造り重ねた事であらうに、今度このたび嬉しくも娑婆の中にも南閻浮提しかも釋尊の御正統正法密附のお嫡流承陽大師のお血脈を戴いて位大覺に同じうし已る眞に是れ諸佛の子なりと御保證に預かる身と成たは生死の中の善生最勝の生に相違ない喜ばしいとも辱じけないとも心も詞も及ぶべきでは無い程に唯この上の心懸は斯る目出たき最勝の善身を徒らにして露命を無常の風に任すること勿れと示させられた御教誡を寐ても寤めても忘れぬやう發願行持の利生報恩生れて人間の身を受けたのみならず嫡々相承の佛戒

を受けたてまつつた甲斐のあるやう行往坐臥に慎しまねばならぬ徒らにすると云ふは俗にムダにすると云ふことで何の用にも立たなくすることじや露命と云ふはツユのイノチと申すので消え易き命と申すこと高祖大師のお歌に世の中は何にたとへん水鳥の嘴ふる露にやどる月影とあそばされて有るかくの如く頼み難き御互の身の上であればウカ／＼と此の大切な光陰を送り暮さずに速に無上菩提の大道を會得せねばならぬ昔し支那の梁の普通年中に達磨大師が天竺より遙々と弘法の爲めに西來せられ時の天子武帝といふに御逢ひなされて問答あらせられたこの武帝といふは其の以前より非常に佛法御歸依あそばされ經論の研究は更なり多くの僧尼を度し夥の堂塔伽藍などを建立せられ貧民をも御救ひなされたから時の人が佛心天子と申したほどなる方であつたけれども未だ眞實の佛法を會得せられなかつたに上



つて、達磨大師と機縁契はなかつた。ソコで達磨大師は魏の國の嵩山の少林寺といふ處に往つて壁に面つて坐禪ばかりをして殆ど九年の間も居られた。スルト他の者は達磨大師の此の様子を見て少しも分らぬから、壁觀婆羅門などといふ目をつけて居た。然るに茲に神光大師といふ人があつて、この人は初めは儒者であつて、普く諸子百家の書を調べて、疾くより博學達識の譽があつたなれども、自分に於ては未だ安心の境界を得ないと思ふて居られた處が、フト達磨大師が天竺より渡來して嵩山に御座るといふことを聞き、頃しも冬の未つ方遙々と少林寺に往つて達磨大師に逢ふて、無上の大法を尋ねられたなれども、達磨大師は唯一人壁に面つて坐禪したなりて、一言の答をせぬのみか、フリ返つて見向もせぬ。夜は追々に深けゆくに随つて、雪は次第に降り積つて神光大師の腰を埋め、寒氣は凜々として骨を裂くばかりになつて來た。ソコで神光

大師は血の涙で、大慈大悲に我が爲めに大法の妙旨を御聞かせくだされと頻りに御願ひになると、達磨大師はサモ面倒そうな様子にて、佛法といふものは中々難入難解であつて、三世の諸佛歴代の祖師も碎身粉骨の未御悟なざる。然るを汝が如き輕心慢心を以て争て得るべきと、トツテモつかぬ挨拶に、神光大師もトリツクシヤモなかつたが、求法の精神は凝つて、鐵石の如くでありましたから、達磨大師の一言に勵まされ、携へ居たる氷の如き一刀を引き抜いて、左の腎を斷ち戴つて、達磨大師の面前に抛り出し、不措身命の赤賊を示されたれば、達磨大師は漸く後にふり向ひて、心を持ち來れ汝が爲めに安心せしめんと云はれた。スルト神光大師は心を求むるに不可得なりと答へられたから、達磨大師は汝が爲めに安心し了ると御答になつた。この一言に神光大師は積年の疑團忽ちに氷の如くに解けて、大安心を得られ、遂に支那相承の第二祖となり給



ひた神光大師がかく臂を断ち截つてまでも大法を御求めになつたといふも此の身は無常待み難きものゆゑ未來永劫の大安樂を得るには換えられぬからである孔子も朝に道を聞いて夕に死すとも可なりと云はれてある併し今皆様に臂を断ち手を截りなされと申すのでないが佛祖はかく御苦勞あそばされて御傳へくだされたのであるのを吾々御互は安すくと御受けの出来る様になつて居るのであるから嗚呼有り難い勿躰ないといふ念を起し末だ若い年であるから急ぐには及ばぬなどと思はずいそいで安心決定の身となつて行持報恩が肝要

○参考

○人天に生ずる者は爪上の土の如く三途に墮する者は大地の土の如し。(大集經)

○世に生れて人と爲ること難し佛世に値ふこと亦難し猶ほ大海の中に盲龜の浮木に値ふが如し。(涅槃經)

○人界に生まるゝことは梵天より糸を下して大海の底なる針のあなをつらぬかんよりは難く佛教にあへることは一眼の龜のうきぎのあなにあへらんが如し。(四行法師)

○人の命の無常なることは山の水よりも過ぎたり今日は存すと雖も、明んまでも又保ち難し。(梵網經)

○一心に佛を見たてまつらんと欲して自らの身命を惜ず(法華經)

○世の中をおもひつらねてながむれば (俊成卿)

むなしき空に消ゆる白くも

○つくくと消ゆる空こそ悲しけれ (道信)

あすもきくべき鐘の聲かは



○あすしらぬ我身と思ひどくれぬ間の  
けふは人こそ悲しかりけれ

(絶 其之)



第三節

無常憑み難し、知らず露命いかなる道の草にか落ちん。  
身已に私に非ず、命は光陰に移されて暫くも停め難し。  
紅顔いづくへか去りにし、尋ねんとするに蹤跡なし。熟  
観ずる所に、往事の再び逢ふべからざる多し。無常忽に  
到るときは、國王大臣親暱従僕妻子珍寶たすくるなし、  
唯獨り黄泉に赴くのみなり、已れに隨ひ行くは只是れ  
善悪業等のみなり。

これは修證義の第三節に、無常の憑み難き有様を御云し下された  
御教誠じや、無常と申すとは、『因明入正理論』と云ふ本に、本は無かり  
しに今は有り暫らく有りて還た無し、故に無常と名くと有て、都て  
世の中の物事は、皆忽ちに遷り變るもので有ると云ふことを、諸行  
無常と申すのじや、御經の上には幾らも説かせられて有るが、中に



も『無常經』と申すも經に假令妙高山も劫盡さぬれば皆散り壞れ大海の深くして底なきも亦た枯竭ることあり大地及び日月も時至れば皆盡きぬ未だ曾て一事として無常ならざるは有らずと説かせられてある日月や海山さへも其通りであるから吾々人間の身の脆きこととは申すまでも無いが『涅槃經』には人の命の停まらざること山の水よりも過ぎたり今日は存すと雖も明けんまで保ち難しと有る其れ故に高祖大師は『學道用心集』にも第一最初に世間の生滅無常を觀ずる心を菩提心と名くると仰せられ凡そ佛法の門に入るには何より先に無常の道理を染々と心得ねばならぬ譯を示させられて有る露命と云ふはツエのイノチと訓むのでお經では『金剛經』にも露の如く亦た電の如しと云ふお譬が有て吾々の命を草の葉に滴たつて居る露のやうであるぞと仰せられてある熊澤良介と云ふ儒者の作つた歌に露のひぬ間の朝顔を照す日影の

つれなきよあはれ一村雨のはらくと降れかしと云ふのが有るが何程かこち恨んでも朝顔の露は日の上るに随つて乾いて仕まふ吾々の命も其通り刹那くと縮まつて生れた時に赤飯焚て祝ふた日は時々刻々に久しい昔の事となり涙ながらに野邊送を爲られる日は時計の針の休みなく追々に近づいて來る永明禪師の『宗鏡錄』には年百歳なりと雖も猶ほ刹那の如く東逝の長波の如く西垂の殘照に似たりと云ふて有るが百年生ても其通り况んや百年の命は到底保ち得べきでは無い一息つかざれば千歳長く行くと申して出た息が再び入ねば早や其までじやいかなる道の草にか落ちんと仰せられて有るこの草と云ふことは露に對しての御詞の文と云までの事であるがいかなる道とあるお詞は能く氣を附けて拜讀せねばならぬ吾々互ひが未來後生の行き道は幾つもある天上人間修羅餓鬼畜生地獄の六つが六道じや天上人間の



果報ても生死輪回は免がれ難いに況して修羅餓鬼畜生地獄の四  
悪趣の草の葉に落ちた日には、いかなる苦患を受くることやらし  
みくと思ひ廻せば恐ろしいとも悲しいとも申しやうも無い有  
様今が今までコウして居ても今宵餓鬼道に赴むくことやら明日  
修羅道に呻吟ふことやら身己に私に非ず命は光陰に移されて暫  
くも停め難しと有て自分の身ながら自分の思ふやうには往かぬ  
因果の道理に支配される有様を私に非ずと仰せられた光陰と云  
ふは夜る晝ると申すこと、昨日と過ぎ今日と暮して少しも停める  
ことは出来ぬ紅顔いづくへか去りにし尋ねんとするに蹤跡なし  
紅顔と云ふはクレナ井のカンバセと書て有て年の弱い時の美し  
い容貌此頃までも往來の人に見返らるゝ程の美人て有たと思ふ  
間もなく何時の間にも梅干のやうな婆さんとなり齒の丈夫な  
のを自慢にして梅干の種をポリ／＼と嚼碎いた壯士も今では焼

豆腐の皮が咀にくいと云ふ様になるのが瞬間じゃ白樂天と云ふ  
人の『浩歌行』と申す詩に鏡を把て面を照すに心茫然既に長繩の白  
日を繋ぐなし又大藥の朱顔を駐むるなく朱顔日夜故の如くなら  
ずとある劉希夷の『白頭翁』の歌には言を寄す全盛の紅顔子須から  
く憐むべし半死の白頭翁とあるも同じ心て委いことは『分別縁起  
法門經』の中に老年五種の衰損と云ふことを説かせられて有るサ  
テ／＼果敢ない者は吾人の身の上じゃ昔し漢の武帝が寵愛せら  
れた李夫人と云ふ美人が有たが未だ美しくしい盛りの花を情なく  
も無常の風が吹き荒して九死一生の大病と成た武帝は本より最  
愛の夫人であるからモウ一度顔が見たいと言はれて病牀へ御幸  
を仰せ出され、一天萬乗の君がワザ／＼の御見舞であるから李夫  
人が喜び涙にくれて御目に掛るで有らうと思ひの外切角の思召  
は有難いとも辱けないとも申しあげやうは御座りませんが、モ早



果報でも生死輪回は免がれ難いに況して修羅餓鬼畜生地獄の四  
 惡趣の草の葉に落ち九日には、いかなる苦患を受くることやら、し  
 み／＼と思ひ廻せば恐ろしいとも悲しいとも申しやうも無い有  
 様、今が今までコウして居ても今宵餓鬼道に赴むくことやら、明日  
 修羅道に呻吟ふことやら、身己に私に非ず、命は光陰に移されて暫  
 くも停め難しと有て、自分の身ながら自分の思ふやうには往かぬ、  
 因果の道理に支配される有様を私に非ずと仰せられた、光陰と云  
 ふは夜を晝ると申すこと、昨日と過ぎ今日と暮して少しも停める  
 ことは出来ぬ、紅顔いづくへか去りにし、尋ねんとするに蹤跡なし、  
 紅顔と云ふはクレナホのカンベセと書て有て、年の弱い時の美し  
 い容貌此頃までも往來の人に見返らるゝ程の美人で有たと思ふ  
 間もなく何時の間にもやら梅干のやうな婆さんとなり、齒の丈夫な  
 のを自慢にして梅干の種をボリ／＼と嚼碎いた壯士も、今では焼

豆腐の皮が咀にくいと云ふ様になるのが瞬間じゃ、白樂天と云ふ  
 人の『浩歌行』と申す詩に、鏡を把て面を照すに心茫然既に長繩の白  
 日を繫ぐなし、又大藥の朱顔を駐むるなく、朱顔日夜故の如くなら  
 ずとある、劉希夷の『白頭翁』の歌には、言を寄す全盛の紅顔子、須から  
 く憐むべし、半死の白頭翁とあるも同じ心て、委いことは、分別縁起  
 法門經の中に、老年五種の衰損と云ふことを説かせられて有る、サ  
 テ、果敢ない者は吾人の身の上じゃ、昔し漢の武帝が寵愛せら  
 れた李夫人と云ふ美人が有たが、未だ美しくしい盛りの花を情なく  
 も無常の風が吹き荒して、九死一生の大病と成た、武帝は本より最  
 愛の夫人であるから、モウ一度顔が見たいと言はれて、病牀へ御幸  
 を仰せ出され、一天萬乗の君がワザ／＼の御見舞であるから、李夫  
 人が喜び涙にくれて御目に掛るで有らうと思ひの外、切角の思召  
 は有難いとも辱けないとも申しあげやうは御座りませんが、モ早



や此世でも目に掛つても御目に掛る甲斐がないから御目に掛り  
ませんと云て遂に空しく武帝をお返し申しあげた。ソコで李夫人  
の親戚の人々は李夫人に向つて、セメて終臨の一言に吾々親戚の  
事を宜しく御願ひ申しあげると言ふて呉れたなら御前の無い後  
も天子さまが吾々を寵愛して下さるて有らうにと恨みがてらに  
申したところが李夫人は「ハラ／＼と涙を流し、其れは皆様方の御  
心得違ひや」と天子さまが私をお愛し下されたのは此容貌  
の美しいのをお愛し下されたので、外に何もお愛し下される筈は  
ない。然るに今この病み衰へた淺ましい容態を一目御覽なされた  
なら、染々と愛想がお盡なされるて有らう。私に愛想がお盡なさ  
れば、従がつて皆様方をも疎々しく思食に違ひない。其れゆゑ目  
に掛らぬ方が却て皆様方のためにもならうと思ふ。サテ／＼憑み  
の無い世の中で有ると云ふて、一期の命は消えたと云ふことじや。

其後武帝は果して李夫人を戀慕ふて其親族の李廣と云ふものを  
海西侯と云ふ大名に取立て、又李少翁と云ふものを召出して返魂  
香を焼いて祈らせれたことなども有ると云ふことじや。いか程戀慕  
ふても返魂香を焼て祈つても、モ早や何とも致し方のあるもので  
は無い。氣の毒なことには武帝の時は未だ佛法の渡らぬ時て有た  
から、コンな耻かしいことを歴史に書れて千歳の後まで耻を晒ら  
さねば成らぬ。サテ熱／＼観ずる所に往事の再び逢ふべからざる  
多しと云ふは、是れまでに過ぎ去た事を思ひ出して、世の中の無常  
なることを觀念せよとの御教誡じや。解脱上人は「一たび往事を顧  
りみれば深更の夢枕上に空しく再び將來を想ふに幽冥の路、跌下  
に在りと敷かれた。實に物換り星移りゆく有様は流水に譬へても  
奔馬に比べても中々思ひ及ぶべきては無い。箭の飛ぶに譬へても  
閃めくに比べても取返し付くべき筈は無い。昔し唐朝の學者に



劉禹錫と云ふ人が有て、久しく學問修行のために他國へ出て居たが、進士及第と申してお役人になる試験を受けるため、久しぶりて都へ往て見ると、玄都觀と云ふ道教の寺の庭に桃の華が盛りに咲いて居た。年の往かぬ時に幾度も此寺へ參つて有たが、其頃には桃の樹は無かつたに、此寺の道士たちが近年植たものと見えると云ふので、玄都觀裏桃千樹盡是劉郎去後栽と云ふ詩を作つて有たが、其後また十餘年を過ぎて玄都觀へ往て見た時には桃の樹は一本も無く、又其樹を栽えた頃の道士たちも一人も居なかつた。ソコで植桃道士歸何處、前度劉郎今又來と詠じたと申すことが『隋唐嘉話』と申す本に見えてあるが、實に一旦過ぎ去た事に再び逢ひやうの無いことが多い。斯くて一日一日と明し暮すうちに、無常忽ちに到るときは、國王大臣親臨從僕妻子珍寶たすくるなし、唯獨り黃泉に赴くのみなり、國王とは天子さまのことであるから、吾々人民をドの

様に可愛がつて下さることか、凡そ何處の國の國王でも其うては有らうけれども、別して我國の天皇陛下は御先祖さま以來御代々「すべらぎの神の御言を承け來つゝ、彌繼々に世を思ふ哉」と詠あそばされた通り、世界萬國に比の無い皇室の事であれば、然いと云ふに付け、寒いと云ふに付け、實に子供の御世話をなして下さるゝやうに萬事御心を惱まさせられ、辱じけなにと有難いとも申しあげ様の無い御仁心であらせらるゝから、吾々人民の死生に拘はることは如何ばかりお心を惱ませらるゝことにも推量りたてまつることは出来んほどであるけれども、サテ吾々が無常の風に誘はれて冥途の旅に赴むくと云ふ場合に成てけ、如何なる御仁心でも致し方が無い、况して大臣がドウして之を防いで呉れられやうぞ、親族でも隣まじい者でも、從者でも婢僕でも妻でも子でも、唯々泣悲むまでの事て何の所詮もあるべきやうは無い、况んや財寶珍



器を何ほど貯わへて置いたからとて冥途の旅の路用にはならぬ。黄泉と云ふことはヨミヂと訓ませて冥途と云ふも同じ心じや冥途と云ふは幽冥の途と云ふことで幽はカスカ冥はクライと云ふ字であるから行先の分らぬ暗夜のやうな道と申すこと天台大師の『摩訶止観』と申す本に「澹然として長く往きぬれば所有の産貨は徒づらに他の有と爲る冥々として獨り逝く誰か之を訪らはんや」とある昔し白河天皇の御近習に權中納言保定卿と言はれた公卿衆が有たが重き病氣に罹つて遂に果敢なくなられたのを白河天皇ことの外に惜ませられて其頃御祈禱の靈驗あらたかであるといふ評判の高かつた名僧の増譽上人と隆命上人との兩人に仰せ付られて保定卿の宅へお加持にお遣はしなされた兩上人は保定卿の遺骸の前で頻りに『法華經』を讀て祈られたところが保定卿の宿因まだ盡きなんだものと見えて忽ち蘇生られたとある、ソコで

保定卿は深く道心を起して佛法の信仰甚だ篤く或時かの『摩訶止観』を讀んで冥々として獨り逝く誰か之を訪らはんと云ふ所へゆくと、サメくと涙を流し昔し一旦息の絶えた時には實に之れに違ひなかつた妻子眷屬が如何に泣悲んでも何の益にも立たず今宵にも復た出た息が入らなくなれば矢張り誰あつてか道連になる者は無けれども今では佛法を聽聞したお蔭で冥途の路用が相應に出來て居るから試に心が大丈夫であると言つて喜ばれたと申すことじや昔は殉死と申して身分の重い方々が歿なられた時に御近習の人などが生埋めにされたことも有たと申すことで垂仁天皇の時に其れをお禁めに成たこともあれど三百年程前までは大名の家來が主人の歿なつた時に腹を切て死ぬ者も有たと申すことじやが是れは冥途まで供をする考へて有らうけれども因果の道理は自業自得と申して自分の業因は自分だけに感得するの



て有るから、此世に居る間こそ主従であるとか夫婦であるとか申して居ても、其因縁が違へば未來の果報は一緒にならぬ。ソコで善に付け悪に付け業因だけが未來迄離れぬのじやから、ソコの道理を己れに随ひ行くは只是れ善悪業等のみなりと仰せられてある。業はワザと訓む字で善事にせよ、悪事にせよ、身て行なふこと口で言ふこと意で思ふこと皆それを業と名ける。其業が因に成て未來に生れ替るのであるから、地獄の業因を造れば地獄に落ち、畜生の業因があれば畜生に生れる、人間も天上も佛も菩薩も皆その業因次第であるから、何でも悪い業因を造らぬやう、成るたけ善い業因を積まねばならぬ。然るに善いと云ふ善いことの多い中に、懺悔受戒ほど善い事は無い、善業と云ふ善業の多い中に、發願行持ほどの善業は無い、ソコで我宗に於ては何事を措いても、先づ第一に懺悔滅罪て無始劫來の罪障を除き、次に受戒入位て必らず佛に成ると

云ふ位が定まり、其上には發願利生に行持報恩、寢ても寤ても四恩報謝に怠たりなく、商人は商業そのまゝに一切衆生の爲めに働らき、百姓は農業そのまゝに佛祖の御恩に報謝するのじや、サー斯う成て来れば死ぬも一切衆生と諸共に生れ替るまでのこと、生るも三世の佛菩薩と諸共に衆生濟度をするまでのこと、有るから、蓋然として獨り逝く誰か之を訪らはんなどと云て歎き悲むには及ばぬことになる。サテ、有難い身の仕合ではあると、染々よろこばねばならぬては御座らぬか。

○参考

○妻子珍寶及び王位命終る時に臨んては随ふ者なし、唯戒布施不放逸、今世後世伴侶と爲る、(大集)



○山に入り市に交りても遁れ難きは無常の使關を固め兵を集めても防ぎ難きは生死なり。(平家)

○名利身を助くれども野原の末に棄られて雨露骸を潤し、恩愛心を惱ませども中有の旅に出てぬれば悪業神に隨ふ。(全)

○大事を思ひ立たん人は去り難き心にかゝらん事の本意を遂げずしてさながら(その)捨つべきなり。おほやう(大)人を見るに少し心有るきは(は)の(皆)このあらまし(あり)にてぞ一期は過ぐめる。近き火杯に逃る人は暫しとや云ふ身を助けんとなれば恥を顧ず財をも捨て、逃れざるぞかし命は人を待つものかは無常の來る時は水火の攻むるよりも速にして逃れ難し。(草然)

○おくとみし露もありけりはかなくて、  
消えにし人を何にたとへん  
(和泉式部)

○なべて世をたとへし露にくらぶれば  
(行願上人)

○紅葉を風にまかせて見るよりも  
はかなきものは命なりけり  
(大江千里)





第四節

今の世に因果を知らず、業報を明らめず、三世を知らず、善悪を辨まへざる邪見の黨侶には群すべからず。大凡因果の道理歴然として私なし、造悪の者は墮ち修善の者は陞る、毫釐も忒はざるなり。若し因果亡じて虚しからんが如きは、諸佛の出世あるべからず、祖師の西來あるべからず。

これは修證義の第四節で、佛教普通の原則である三世因果の道理を示させられた御教誠じや、一節僅に百二十字しか無いけれども御文が三段に分れてある。初めに因果の道理を知らぬ邪見の輩を誡められ、次に「大凡」といふから下は正しく因果の道理を示し、終りに「若し」といふ所からは因果の道理に依て佛祖の御出世あらせられたことを御教くだされた最初の處に因果と業報と三世と善悪

との四つを擧げて邪見を誡しめられて有るが、此中で三世と云ふは時間の上のこと、あとの三つは都べての物事の上に皆離れぬこととて、三つを互ひに掛合せて見れば能く分る。先づ業と云ふことは作業と續いて、吾人互が朝な夕なの仕ること爲すこと、口で言ふこと、意で思ふことを、都て業と名くるので、シワザともハタラキとも訓ませる字じや、偕その朝な夕なのシワザ、ハタラキ意に思ひ口に言ひ身に行なふ諸々の業の上に、善業もあれば悪業もある。善業と云ふは佛祖正傳の戒法に適ふのが最上の善業で、佛祖正傳の戒法に背くのが何よりの悪業じや、偕その悪業にもせよ、善業にもせよ、吾人互のシワザ、ハタラキが種に成て、種々様々の物事が起つて来る。譬へは器械場や蒸氣船の釜の下に石炭や松薪を詰込て火を附ければ、ドン／＼火が燃え上る。火の燃えるハタラキが種に成て、湯が沸く、湯の沸くハタラキで蒸氣が立つ、蒸氣の力で車が廻る。



車が廻れば船が進む、器械が動く、器械が動けば機も織れば紙も漉く、船が進めば荷物も運べる、軍も出来る、初めに焚た石炭や松薪は時々刻々に灰に成て仕舞ひ湯も蒸氣も追々に消て仕舞ふけれど、順ぐり順ぐりに業から業と相續し、シワザからシワザと相續して、時こそ移れ處こそ變れ、ドコ迄も斷ゆると云ふことの無いのが、取も直さず業因から果報へ相續して、永劫苦樂昇沈する實際の有様じや、因と云ふは種と云ふことと、近頃世間で原因と云ふのが夫れじや、今では世間の學問でも、凡そ原因ありて結果あらずと云ふことなく、既に結果ありて原因あらざるは無しなどと言ひますが、天地萬物多し中にも、其萬物の靈長と言はるゝ人間が、何の原因も無く、此世へ生れて來たと云ふわけのもので無い、又萬物の靈長たる人間が、一生五十年七十年、長い間のシワザ、ハタラキが、釜の下の松薪ほどの力も無いものとは思はれない、然らば生れて來たには

生れて來ただけの業因が無ければならぬ、其れだけの業因が有たからこそ、現在此れだけの果報が顯はれて居るに違ない、さては現在一生の間に顯はれて來る、都ての苦樂貴賤榮辱貧富強弱智愚妍醜、皆これ過去世の生れぬ前に造り置きたるシワザ、ハタラキ謂ゆる業因の影法師が、かく有くと顯はれて來たものに違ひ無と云ふことを、染々信仰せねばならぬ、過去から現在へ持越た因果の道理が斯うと分つて見れば、現世から未來へ持越す業因果報も、決して味ますことのならぬ、今更申すまでも無い、其過去と云ひ、現在と云ひ、未來と云ふのが、謂ゆる三世で、業因果報の相續する前後の都合で、時間に差別の名が附たのじや、斯る道理は假初めにも物の道理を聞分るほどの智識ある者ならば、無學文盲の野蠻人でも、直に吞込が附く筈であるに、昔も今も同じこととて、撥無因果の邪見に陥り、善惡因果の辨まへも附かず、冥きより冥きに迷ふて、永劫出



離の望み無い黨類が多い其れを邪見の黨侶と申すので其んな仲間  
間に交はるなよと仰せらるゝのじや邪見と云ふは正見の反對で  
見は見込と云ふほどのこと見込違ひをしてヨコシマなる思考に  
執着する即ち因果も善悪も無いと思ふ者のことじや中々因果の  
道理と云ふは其んな譯の者では無い歴然として私なし造悪の者  
は墮ち修善の者は墮る毫釐も忒はざるなりとの御教訓じや身に  
染くゝと信仰して悪業とあれば囁にも恐れ慎み善業とあれば話  
にも樂み戀ふべきで有る解脱上人のお示にも先の因たる戒善の  
力は今の身に既に果し畢りぬ後生善處の貯へは望むところ何事  
ぞ數十餘年の日々所作は悪業のみ實に多く百千萬億の念々の  
思惟は妄想のみ至て深しと誠められて有る現在人間に生れたの  
は過去に五戒を持ちたる業因の力らに由ると云ふことなれど其  
善業は今生限りて盡きて仕舞ふさては未來を何としやうぞ日々

の所作は悪業のみ多く念々の思惟は妄想のみ深いと有ては悪道  
に沈淪して苦報を受るより外はない『大般若經』に斯う云ふ譬へ  
がある空に向つて矢を射るやうなもので前の矢の落ぬ間に次の  
箭を番いて射れば其箭が前の矢の矢筈に當つて前の矢を落とさ  
ぬ又其次其次と射て順々に前の矢を落さぬやうにする是の如く  
前世の戒善の矢を今生戒善の矢で失なはぬやうにせねばならぬ  
と云ふも譬じや外典の『列子』やにも之に似た譬が有つたと思ふ  
『莊子』に百里に遠く者は春糧を宿にすとあるも同じ道理じや遠方  
へ行かうと思ふには前々から旅費の用意をせねばならぬまして  
茫々たる宇宙の間に永劫取返の附かぬ苦樂沈昇の分け目の軍の  
首途の支度じや並大抵に思ふて濟まうか幸ひに吾々も互は遇ひ  
難き佛祖の遺法に遇ひたてまつり受け難き佛戒を受けたてまつ  
る身の仕合喜ばしいとも嬉しいとも申しやうの無いは唯この一



事のみじや然るに其佛祖の御出世も亦た因果の道理の虚しからぬ故であるとの御教訓じや若し因果亡じて虚しからんが如きは諸佛の出世あるべからず祖師の西來あるべからずと仰せられてある諸佛と云へば釋迦如來も阿彌陀佛も乃至十方三世の一切諸佛いづれも皆慈悲心孝順心の常住佛性なる佛戒を受けさせられて持たせられた其最初の善業を因として無上正覺を成就せられたのじや若しも因果の道理が立たずば何程成佛の業因を積ても決して成佛することはなるまいに因果の道理の虚しからぬ證據には諸佛の成道十方三世に乏しく無い祖師の西來と云ふは達磨大師が天竺から支那へち出に成たことじや達磨大師が佛祖正傳第二十八代の佛戒を震且の二祖慧可大師に御傳へになり其れから更に二十三代目で高祖大師が我國へ弘め下され現在我々互が其正傳の數に備はり嫡々相承の佛戒を面のあたり受けたてま

つることを得たるも皆是れ因果の道理歴然として虚しからぬお蔭であるさて此の一節の主意を一口に申せば因果といふものはないものであるといふ邪見の輩に交るなどの御教訓である人といふものはその交る所の人に由つて善くもなり悪くもなるものであるから何でも心をつけねばならぬ自分には何とも思はいても交る人が悪ければツイ自分も悪くなる朱に交れば赤くなるとは實によく云ふ辭じや東京田町二丁目の裏店に住んで居た荒井松太郎と云ふものは生れは遠州城東郡横須賀の者て若い時から東京に出かけ或る擣米屋に奉公致したが性質至つて正直であるから大に主人の心に叶ひ遂に主人の媒にて主人の姪を女房となし明治十八年の頃湯島邊に擣米屋を出し夫婦もろとも晝夜のわかちなく家業をわけみましたから程なく花主も出來て相應に暮して居たが松太郎は四十の歳を超えても一人の子もないのを



心配して種々と心を苦しめる折柄彼の九星とか家相とかいふ愚  
説をなす者に逢ふて此のことを告げたる處彼はシタリ顔にて此  
れは貴殿が今の店を開いた年廻りが悪るかつたのと方角の悪い  
からであるから早く何かへ移らねば番子を設けることのならぬ  
のみならず貴殿等夫婦の命に拘はるといと眞面目に教へたから  
正直一途の松太郎夫婦は其の説を信じ舊主人の達て留むるをも  
聞かず折角賣込みし店を棄て、神田美土代町へ引移つたところ  
が其の日は丁度彼の神田の大火事の日であつた松太郎は引移り  
の夜の出火なれば近邊の様子は知らず又知己人達も松太郎の引  
移つた事を知らぬ者が多かつたから誰一人手傳に來る者もなく  
遂に全焼となつて俗に云ふ箸も持たぬ乞食となつた固より舊主  
人の語を用ゐずして移轉した事なれば資金の無心もいひかねて  
途方に暮れたがさればとて仕様もないから種々様々と工面をし

て漸く些少の資金を求めて再び商業を始めたなれども兎角思は  
しくゆかずかて、加て女房は病氣にかゝつて床についたから彼  
の迷深き心は愈々迷に迷を重ね天理教金光教さては事の妙法な  
ど種々雑多なる左道に迷ひ入り今は商法もろく／＼にせずこゝ  
かしこかけ廻つて居るから家業は益々衰へて表店に住むことも  
ならず遂に今の裏店に逼促して今は其の日の烟さへ立てかぬる  
やうになつた然るに其の年の去る月に女房の兄なる某が脚氣衝  
心にて俄に死去して其の報知があつたれど女房は引續の長病に  
て吊辭に往くことも叶はぬから松太郎は不取敢その家に至り送  
葬に立ち其の初七日にも参詣したるがこの家の菩提所は小石川  
なる眞宗某寺なれば當日勤行の節住職が白骨の御文を拜讀せら  
れたを聞き松太郎は茲に始めて世の無常を感じ歸宅の後女房に  
向つて此の事を物語して居たが松太郎の隣に小宮山吉兵衛とい



ふ羅苧のすげかへを營業とする老人は、固より眞宗の信者であるから、壁越しに松太郎夫婦の物語を聞き、大に喜んで訪ね來り、懇に因果の道理を諭し、現世祈禱や家相方位の益なきことを語り聞せられた。松太郎は年來の迷の夢忽ちに覺め、其の日より家業三味に勉強し、暇ある時は吉兵衛と共に近傍の説教に參詣し、女房にも之を語り聞せたから、女房の心も開けて、藥の効も次第に顯れ、遂に全快して、壯健の身となり、又舊主人の方にも詫入り、若子の資金を借りて、又もや白米商を開業するやうになつたといふ。この松太郎も因果の道理が分らず、邪見の輩の說を聞いて迷ひ込んだから、斯様な難義を致したが、白骨の御文や吉兵衛の因果の道理を聞いて、迷ひの夢も覺めて、再び幸福の身となつたのであるから、よく氣をつけて、邪見の輩に交らず、因果歴然の道理を信じ、我身ながら宿善の目出度果報を得たものであると喜び勇んで、發願行持一切衆

生もろともに諸佛の位に入らせにや置かぬ身分相應四恩報謝の勤を怠らないやうに心掛るが何より肝要。

○參考

- 善惡報應は禍福相承け、身自ら之れに當る誰れの代る者なし、數の自然其の所業に應ず、殃咎命を追ふて縱捨するを得るなし。(無量經)
- 善因は則惡報を受けず、惡因は終に善果を受けず。(正念經)
- 一闡提は因果を信せず、慚愧あることなく、業報を信せず、現在及び未來世を見ず、善友に親かず、諸佛所説の教誡に隨はず、是の如くの人を一闡提と名づく、諸佛世尊の治する能はざる所なり、何を以ての故に、世の死屍は醫の治する能はざるが如し。(涅槃經)
- 鄙夫人を染むること臭物に近くが如し、迷をすゝめ非を習ふて覺えず、惡をなす。(法句)



○悪友を避くること虎狼を避くるが如く、良朋に事ふること父母に事ふるが如くすべし。(實徳宗)

○炎のみ虚空にみてるあび地獄 (源 實朝)

行方もなしといふぞはかなき

○草からす霜また今朝の日にさえて (よみ人しらす)

因果は早く廻り來にける

○何事もけふの歡樂すぎぬれば (雲居禪師)

必ずあすの苦患とぞなる



第五節

善惡の報に三時あり。一者順現報受、二者順次生受、三者順後次受、これを三時といふ。佛祖の道を修習するには、其最初より斯三時の業報の理を效ひ驗らむるなり。爾あらざれば多く錯りて邪見に墮つるなり。但邪見に墮つるのみに非ず、惡道に墮ちて長時の苦を受く。

これは修證義の第五節にて三時業の道理を御示し下された祖訓にて御座る。委しいことは正法眼藏の第八十三卷目に三時業といふお題にて御教訓に成てあるが、此は唯其名目だけを擧げられたまで、の事であれど、其大要のところは是れて十分に分ります。さて前の第四節で善業でも惡業でも其業報は決して逃るゝことの出來ぬ道理は明らかに分つて居るが、其善惡の業報を受ける時間に三通りの差別あることをよく合點して置かねば、遂に邪見に陥つ



て悪道の苦患に沈む者が多い、ソコで洪大のお慈悲から此御教訓があるのてす世の里諺にも桃栗三年柿八年と云ふことがあるが、實に同じ草木でも其年の内の春に種を蒔て直に其秋實る米のやうなものもあれば、去年蒔て今年刈取る麥もあり、三年立て始めて實の成る桃や栗もあれば、八年たなければ實を持たぬといふ柿もあるやうなわけて、吾々衆生の業報も亦た其通り、此世で造つた善悪の業が直に此世の内に報ふて來るとも有る、其れを順現報受と云ふのじや、然るに又此世の業報を此世では受ず、次の世で受けたり、又は此世で覺るの無い前の世の業報が此世へ現はれて來たりするものが二つ目の順次生受です。さて又直に其次の世にも現はれないで、二世も三世も隔てた次の世に業報を受けるのを順後次受と申すのじや、「善悪因果經」と申すお經には、報を受けること同じからざる者は皆先世の用心等しからざるに由ると説かせられ、又

業道は權衡の如しとも有て、權衡ほど正直なものはない、一厘一毛でも用捨は無く、少しでも重い方へ傾むく通り、種々さまざまの業報のある中で、僅かでも重い業が先に現はれ、其業が盡されれば、又其次の業が現はれると云ふのが業道の定則であると申すことじや、其れ故に今生には若い時から佛のやうだと人にも言はれるほど、慈悲善根の行ひもある仁人君子でも、其果報は少しも無くて、不幸不仕合ばかり打續き、誠に氣の毒な有様の人もあるれば、之に引かへ悪い事に掛ては何一つ抜目のないと云ふやうな悪人が、一生富貴榮華を暮らす者もあり、又若い時から勉強した其原因が追々に現世に現はれ、今では左團扇の樂隱居に成たと云ふ順現業の年寄もある。この道理さへ能く分れば、世の中に恨むべきとも無ければ、羨やむべき筋も無い、皆な自分自分の生々世々に造り重ねた善悪の影法師が有り、くと淨玻璃の鏡に映つて來るのぢやと云ふと



に得心が往かねばならぬ然るに道理の分らぬ者は今も昔も同じ  
こととて種々さまざまなる邪見に沈んで恨むべからざること恨  
んだり何の詮も無いことに苦んだりする者が多い昔し裴扇閻國  
と云ふ所に提章と云ふ娑羅門種族の女が有て家も随分富榮えて  
何不足ない身て有たが不仕合なことには夫に早く死別れて子供  
一人も無かつたから其れのみ朝夕に悲しく思ふて居たが娑羅門  
の教では三時業の道理を知らぬに依て斯る不仕合の業報も畢竟  
此身のある故である此身を燒棄て、那羅延天と云ふ天上に生れ  
たいと云ふ願を發し既に薪を積み重ねて自ら火に飛入らうとす  
る所へ折よくも佛敎の僧侶て鉢底婆と云ふ人が來合せて其有様  
を氣の毒に思ひ親切に善惡業道の道理を説聞せ譬へば牛が重荷  
の車を挽やうなもので牛は車さへ破れたならば重荷が無なるて  
有らうと思ひ岩角などに車を打當て車を毀してしまふても荷物

のある間は復た別の車を附られて、ドゥまでも挽かせられねばな  
らぬ今業道も其通りて無始劫來積み重ねた業因の重荷の有らん  
限りは何ほど此身を燒棄て、も又幾度も生をかへ身をかへて其  
業を果さねばならぬ唯一心に懺悔滅罪すれば前身の惡業いかに  
かり重くとも其れは月を覆ふ雲の如く吹拂はれて跡なく消え後  
心に受戒入位すれば燈の闇黒を消すが如く天地たちまち明かに  
なると云ふ道理を説諭されたので提章女は夢の覺めたる如く得  
心か往き直に懺悔の儀式を行ひ戒法を受けて得道したと云ふこ  
とが「経律異相」と申す本に書いてある誠に此婦人は仕合な人であ  
つて危険ところへ陥りながらも斯る正き教を受ることが出来た  
から邪見に墮ちて惡道に沈むの苦艱を逃れたが正き教に遭ひ得  
ぬ人は誠に氣の毒なものである昔も支那の司馬遷といふ人は太  
史公と申して儒者仲間では實に名高い人であるが伯夷叔齊とい



ふ人たちの事を書て天道は是か非かと言ふたとある伯夷叔齊と云ふは兄弟で孤竹と云ふ所の大名の子じや其父親が弟の叔齊を可愛がつて其れに跡を譲らうと云ふ心がある兄の伯夷が其れを察して私に斯うして居ては父親の思召を遂げさせることが出来ぬと思ふたから出奔して行衛知れずに成て仕まふた然るに弟の叔齊は設ひ父親の思召でも兄をさし置て家督に成るわけには往かぬドコまでも兄を捜し出してと云ふので是れも家出をして仕まふた其内に親は歿なり家は亡びて兄弟二人流浪して居た然るに丁度其頃周の武王と云ふが時の天子の殷の紂王を亡ぼして天下を治めやうと云ふ軍の門出に出あふたが伯夷叔齊は固より義理堅い兄弟であるから設ひ紂王が悪いにもせよ臣下の身で君に敵しては悪いと云ふて武王を諫めたが武王は聽入れずに紂王を亡ぼして天子に成たソコで伯夷叔齊は武王のやうな不忠の

人が天子に成たと云ふからには、モ、此國の米は食はぬと云ふて首陽山と云ふ山の中へ入て薇の根を掘て食べて居たソ、すると或人が薇と云ふても矢張武王の天下の物で有るに何故それを食べるかと云ふたソコで伯夷叔齊は然らば薇の根も食はぬと云ふて遂に兄弟諸共に餓死したと云ふことじや誠に其心の正しい其行ひの清いことは古今比類の無いこととて孔子も仁を欲して仁を得たりと褒められた程の人であるが其孔子が仁者は壽長しと云はれたにも相違して一生不幸にして遂に餓死するとは何事ぞ儒道の經書には天道は善に福ひし淫に禍ひすと云ふて有るけれど此様子では天道と云ふても當にはならぬと云ふので天道は是非かと云ふ疑念を起したので有りましたやうが誠に淺ましい考へと申さねばならぬ吾々人間に於ては僅に五十年か七十年の命の間を一生と定めて其一生の内にも何も彼も勘定を済まして仕ま



ふ積りて居らうけれども、天道と云ふとに成ては、五十年や七十年や吾々の一世や二世の間をのみ當にして、萬物の消息を司さどつて居るわけには有るまい。我が佛教の眞如法性と云ふ程のことに比べて見ればこそ、淺い深いの差別は有らうけれども、宇宙の始終、萬物の起滅に關する天道の支配振が、吾々人間の一生の内に勘定が合はぬからとて、其れを恨んで天道を疑がふとは何事ぞ。顔回と云ふ孔子の一弟子が仁者である賢人であると言はれながら、一生貧乏して天死したと云ふことも、盜跖と云ふ賊徒が一生富裕で長命したと云ふことも、皆同じ道理で有て、三時業の道理が分らぬうち、決して成ほどと合點することが出来ぬで有らう。ソコに合點の往かぬ間は、儒者の方で大切にする『書經』と云ふ本に「天の作せる禍ひは猶ほ去るべし、自ら作せる禍ひは逃る可からず」と云ふて有たり、又曾子と云ふ賢人が「之を戒めよ之を戒めよ爾に出る者は爾

に反ると言はれたのも『易經』の中に「天道は好て還すと云ふてあるのも、皆悉く其道理が分らんことになる。さて順現報受の此の世でなした業によつて、此の世でその報を受けるといふことさへ確と合點がゆきかねるとしてみれば、順次生受、順後次受などの、此の世の業が來世で報ひ、又その先の世で報を受けるといふことは、猶更合點の出來かねるに相違ない、さればとて物の道理はかやふに判然として少しも昧ますことはない。あかし道理ばかりで申しても、分り難い人には、致方がないから、少しは事は違ふても類似た事柄を以て申さねばならぬ。彼の織田信長といふ人は、誰も知つて居らるゝ通の豪傑で、足利氏の末に起り、麻の如くに亂れ切つて居た天下を殆ど一統し、天子様の御宮室なども御修繕をなし、御供膳なども手厚して忠勤を盡くされたなれども、如何に戰國の世とは云ひながら、神社、佛閣などを猥りに燒壞し、僧侶なども澤山に殺し、自



分の家臣と申すもの、明智光秀のやふな大將を大勢の中で辱しめたりなど、餘りに慘酷な事をしたり、自分の氣儘ばかりを逞にしたりから、遂に本能寺に於て光秀の爲めに亡されて仕舞たが、これが順現報受ともいふか。それから其の次に起つたのが豊臣秀吉秀吉は信長の草履取からなりあがり關白にまでなり、遂に朝鮮征伐をして支那四百餘州まで併呑しようとした英傑ではあるが、是れも随分我儘を恣にし、自分の嬖の淀君のいふことは何でも聞き、縦ひ悪いにせよ一旦懺悔して僧にまでなつた甥の秀次の切腹した後までも、三十餘人の妾から小供までを残らず殺し、畜生塚と云はしたなどは實に殘忍極まる話してある。斯様な工合であつたから自分の存生中は幸に無事であつたなれども、其の子の秀頼の代になつたれば直に亡びて仕舞た、これが順次生受ともいふべきか。其の次は徳川家康である。家康といふ人は一生涯戦にも大方負け

てばかり居られたなれども、幸に壽命も長くて信長や秀吉が骨を折つて鎮定した天下をスツクリ受け取り、六十餘州を手の中に握られた。しかし此の時は餘程の老年であつたから直に位を二代將軍に譲られた。コンな有様で自分一生の間は樂をせず終られたが、存生中誠に佛法を信仰して慈悲の心があり、萬事に控目を主として少しも驕るといふ事をせられなかつたから、十五代二百五十年の間太平無事を持れた。これが先づ順後次受とても云ふのであらふか。一鉢三時業といふは其業力の如何によつて其の報を受けるとの時の違ふことをいふので、俗にいふ親の因果が子に報うといふやうな事ではないけれども、來世で報を受けるとか又さきの世で報を受けるとかいふても、合點のゆき難い向もあらうと思ふて、假りにこの話をして早い遅いはあつても因果報應は味されぬといふことを論じ申したのじや、佛教を聞いたことのない人たちは斯



る道理も合點がてきぬゆえ、撥無因果の邪見に陥て誠に氣の毒な次第であるに、吾々御互は如何なる宿善の催ふしやら、飽くまで因果報應の正しき道理を聞き明めて、其の業報の根本から消滅させる懺悔滅罪、さて其上に宇宙の眞理そのまゝに吾等が平生履み行ふべき常住佛性と現はれて來た受戒入位の身となつて、此身此儘三世の諸佛と寸毫かはらぬ發願利生さて、麗しい安心起行の境界と成得たは、申さう様の無い有難い身の仕合と歡喜の涙に咽びつゝ、報恩の行持おこたらぬやう。

○参考

○假令百劫を経るとも、所作の業は亡びず、因縁會遇の時、果報は還て自から受く。(大寶積經)  
○凡そ人但仁の天に暴の壽に逆の吉に義の凶なるを見て、便ち因果亡

く罪福虚しと謂ふ殊に知らず、影響相隨ひ、毫釐も忒ふこと靡し、縱ひ百千萬劫を経るとも亦磨滅せず。(正藏法)  
○纖芥の惡も歷劫亡びず、毫釐の善も積世長く存す、福成れば則ち天堂自ら至り、罪積れば則ち地獄斯に臻る。(集弘明)  
○積善の家には必ず餘慶あり、積不善の家には必ず餘殃あり。(文目)

○民ぐさの夏のかせぎのほどく(よみ入しらす)に

穂にあらはれて見ゆる秋の田

○つゝめども人の心のよしあしは(和泉式部)

かざりの時にあらはれぞする

○五月間木の下道はくらきより(尊圓親王)

冥きに迷ふみちぞくるしき

○心から心に物をあもはせて(西行法師)



身を苦しむる我が身なりけり



第六節

當に知るべし今生の我身二つなし三つなし徒らに邪見に墮ちて虚しく悪業を感得せん惜からざらめや悪を造りながら悪に非ずと思ひ悪の報あるべからずと邪思惟するに依りて悪の報を感得せざるには非ず。

此れは修證義の第六節の御文で修證義を五章に分けられて有る中の第一章總序が六節ある其結びの言葉であります此御文が自づから二つに分れて初めに當に知るべしと云ふところから惜からざらめやといふところまでは前の第二節と第三節とを結びせられたので又悪を造りながらといふところから感得せざるには非ずと云ふところまでは第四節と第五節とを結びせられたので有ります實に前の第二節に於て人身得ること難し佛法値ふこと稀れなり今我等宿善の助くるに依りて既に受け難き人身を受



けたるのみに非ず、遇ひ難き佛法に値ひたてまつれり生死の中の善生最勝の生なるべしと御示しなされて有る通り世の中に生きとし生けるものは幾千万とも數へ盡し難いほど色々な種類が有て、一滴の水の中にも八萬四千の虫が居ると云ふほどの事有るけれども、其萬物の靈長と仰がるゝ人間の身を受けると云ふことは並大抵の果報では無い果報と云ふ中にも色々有て、鶴は千年龜は萬年とも云ふから、鶴や龜は禽畜類の身ながらも長生をしようと云ふだけの果報は人間よりも勝れて居るでも有らう、馬や牛は人間よりも力が強い、虎や豺狼は人間をも取て食ふ、象や鯨は人間よりも幾層倍大きな軀體を持って居る、是れ等も皆な其れくの果報には違ひなからうけれども、孔子の教でさへ朝に道を聞いて夕に死すとも可なりと云ふて有る、長生するのが嬉しいとは云ふて無い、マシテ况んや力が強い軀體が大きいのと云ふことを尊ぶべき

わけては無い唯々道と云ふ中にも別して最尊無上なる三世諸佛の御教を聞きたてまつりて、我も亦た諸佛同等の身と爲るのみか、果報の中の最大果報、人間に生れた所詮は此外に有るべきで無いけれども、同じ人間に生れた中にも西洋諸國に生れた人などは、マツと耶蘇教を聞くことが出来た位のことでは、是れまでは佛教と云ふ最尊無上の御教が此世の中にあると云ふことさへ知らずに、空しく生れ徒らに死たものばかりで有る、然るに我々互ひは如何なる宿世の善根に催ふされたことと有るやら、先祖代々千百年來佛教に生まれて佛教に育てられ、嫡々相承の佛戒を易々と受け、てまつりて、此身此儘諸佛の位位大覺に同じうし已れる果報のめ、てたさ、實に二度と再びは斯んな果報を得らるべきもので無い、然るに急いで速やかに懺悔受戒の道場にも入らず、發願行持の經營も無くて、犬死同様に空しく成たら、唯獨り黄泉に趣むくのみな



り已れに随ひゆくは唯是れ善惡業等のみぞと第三節に仰せらるゝ通り、一生造りと造りたる惡業の力に引かれて冥きより冥きに迷ふ慙れさよ誠に氣の毒なる次第ぞと御慈悲の涙を垂れさせられて虚しく惡業を感得せん惜からざらめやと仰せられた切角受けた人間の身を佛に成らずに虚しく死ては誠に惜いことでは無いかと嘆かせられたのじやサテ又第四節に於て今の世に因果を知らず業報を明らめず三世を知らず善惡を辨まへざる邪見の黨侶と仰せられて有るやうな外道惡人はいかなる惡いことをしても其のために惡い報が來ると云ふやうなことは無いで有らうと自分勝手に邪しま非道ハ考へをして居ても凡夫仲間の人間の目耳こそ味まされるかは知らんが因果の道理は露ほども味ますことの出來るものでは無いに依て惡いことをして惡い報いを免れることが出来るものでは無い。ソコの道理を惡を造りながら惡に

非ずと思ひ惡の報あるべからずと邪思惟するに依て惡の報を感得せざるには非ずと仰せられてサテ此御文の中の「邪見と云ふ」とに就ては五利使と申して五通りの差別があり身見と邊見と邪見と見取見と戒禁取見との五つの見込違ひは皆惡業を感得する本であるけれども中に就く今この御文では惡取空と申して死だ後に何も残るものは無い焼けば灰埋めば土に成るまでのことて未來も後生も有るもので無いなどと思ふて居る見込違ひのものを邪見の中の邪見ぞと仰せられるやうに伺はれる其れ故に惡を造りながら惡に非らずと思ひ云々と仰せられたので之を空見とも斷見とも名けることとて有りますが「佛地論」と申す本には「我見は唯涅槃に背くのみなれども空見は兼て惡趣に向ふとも説かせられてある譬へば毒に成る物を喰べて置いて幾ら自分の了簡ばかり毒で無いと思ふたからとて毒は毒に違ひないから必らず其



毒に中てられるに相違ないやうなもの、何程自分獨りて因果も業報も有るはずが無いと決心しても、因果は因果に違ひない業報は業報に違ひないに依て、其業因次第に其果報を受けることは萬に一つも間違ひは無い。然るに凡夫の心の淺ましきには、頼みにならぬ自分の了簡を頼みにして取留められもせん、浮世の名利にばかり心を奪はれ、遂に空しく惡道に沈淪する。賊に欺かはしい次第である。「僧祇律」と申す本に面白いお話がある。昔し波羅奈國の迦尸城と云ふところに曠原があつて多くの猿が住て居た。然るに其野中に尼拘律樹と云ふ樹木があつて其下に古い深い井戸が有る。或る夜のこと月が皎々と照り渡つて井戸の中に月影が映つたのを、猿の頭立たのが之を見附けて驚ろいた様子で有たが、サテ手下の猿共に相談するには、此の井戸の中に月が一つ落ちて居るが何とかして之を救ふて遣りたいものである。其れに就ては乃公が片手で

て此の木の枝を捉らひ片手を下へ延ばすから、一疋の猿は乃公の手にすがり、又其次其次と手と手を繋ぎ合せて放さないやうにすれば、直に井戸の底まで手が届くやうになる。ソコで彼の落ちて居る月を捉まいて上げて遣れば、井戸の中へ落ちて死だ月を救ふことが出来るに相違ないから、一同その心得て早速取掛れと差圖をした。ソコで猿の大將が木の枝にブラ下る續いて多くの猿が其次其次と手を繋いだに依て、追々に重く成て遂に大將の捉まいて居る木の枝が折れて仕まふたに依て、大將も手下もドシ／＼と將基倒しに皆井戸の中へ墜落ちて一同死て仕まふたと説かせられて有る。又昔し天竺の提婆達多といふは名高い惡人であつたので、今でも釋迦に提婆と云ふて何時も惡人の引合にされる位な人であつたが、この人は釋尊の叔父様の子であつて、中々學問才藝も人並に勝れて居り、釋尊は三十二相を御具へあそばされ、提婆は三十相



を具へて居たと申す位であつたかなれども、我慢邪見の強いところよりして、阿闍世王といふ王様を誑して、父君母君を弑さしめ、釋尊の御弟子達の多いのを嫉んで御弟子方の和合を破り、五百人の御弟子を自分の方に奪ひ取りました。これは舍利弗尊者が能く御諭になつて再び釋尊の御弟子になられたから、提婆はますます悪心を起して、或る時山の上より釋尊の御通を見かけて、大なる石を推落して壓殺せんとしました。なれども幸に釋尊の御足の指に中つて少しく血が出た位ですみました。が、この時蓮華色といふ羅漢の位に在る比丘尼が、提婆を呵りつけたのを怒つて直に拳を以て打ち殺しました。かやうに大悪を犯しながら自身には何の處にか悪あらん、惡何れよりか生ぜん、誰れか此の惡を作して、當に其の報を受くべき、我も亦此の惡を作して、而も其の報を受けずと、大勢の人中で申して居ました。なれども、いくら自分で悪いことを作て

も其の報があるものかと云ふて居たとて、斯る五逆罪を犯した大惡人、いかで其の報なくてあるべき。果してその歸路に於て大地が自然に裂けて、其の中に陥つて死だと申すことである。かやうに頼むべからざる邪見の木の枝を頼みにして、元來其の實のない名利の月影を捉へんとする愚さ、又自分に惡業を働きながら、その惡業の報があるものでないと思ふて居ても、決して免れることのできずして惡道に陥る愚さ、痴惑とも無明とも名けやうの無い沙汰であるけれども、『摩訶止觀』と申す本には、無明痴惑元是れ法性と説いて有り、『證道歌』には、無明の實性すなはち佛性とも言ふて有る通り、此無明痴惑の迷ひの心そのままに懺悔受戒と、一念の置き所が轉り變れば、取も直さず常住佛性の慈悲心孝順心とあらはれて、發願行持うつくしく、三世の諸佛と同等の覺位に證入する嬉しさを思ひ出で、は、朝な夕なに利生報恩と心懸るが何より肝要。



○參考

○邪見の罪は、衆生をして三惡道に墮せしむ。若し人中に生ぜば二種の報を得ん。一には邪見の家に生ず、二には其の心詔曲なり。(經華嚴)

○寧ろ地獄に墮ちて無量の罪を得るも、人身を受けて斷見を起さず。

(方廣十輪)

○斷見とは、唯だ現在有ることと謂つて、未來を信ぜず。(論佛性)

○邪見は癡の究竟なり、因果を撥無するを名けて邪見と爲す。(論俱舍)

○一切の罪惡は、因果を信ぜざるを以て根本と爲す。(經守護)

○善を修せずして惡逆無道なれば、後に殃罰を受けて自然に趣向す。神明記識して犯す者は赦されず。(經無量)

○偽りを人には云ひて止みなまし。(よみ人しらす)

心の問は、何と答へん

○後の世のむくひをおもへ曲れるも。(證譯上人)

直きもあなじわが影を見て

○慢の修羅暎の地獄を拂ひすて。(慈雲尊者)

慈悲こそもとの姿なりけれ

○心から流るゝ水をせきとめて。(よみ人しらす)

あのと淵に身をしづめけり





第貳章 懺悔滅罪

第七節

佛祖憐みの餘り廣大の慈門を開き置けり、是れ一切衆生を證入せしめんが爲なり、人天誰か入らざらん。彼の三時の悪業報必らず感ぜずべしと雖も、懺悔するが如きは重きを轉じて輕受せしむ、又滅罪清淨ならしむるなり。

只今拜讀致しましたは修證義の第七節の御文で、曹洞宗安心の四大原則となる中の第一番に懺悔滅罪とある其大體を御示し下された御詞で御座る。サテハヤ修證義の毎節に就ての御説教も追々席が重なつて修證義が五章に分れて居る中の第一章だけは、此前の席で相濟みましたが、最初からお話し申して置いた通り、第一章の總

序と申すのは、敢て曹洞宗と限つた事では無く、凡そ佛教の上にては、何宗何派に限らず、皆ことごとく信ぜねばならぬ所の因果の道理を御示し下されたので有りましたが、是れから後は全く曹洞宗の専門に立ち入るので、尤も懺悔と申しても受戒と申しても、何宗に限らず有るには違ひないけれども、同じ懺悔でも二儀兩懺とか五悔とか申して、宗旨々々に差別があり、同じ受戒でも五篇七聚とか小乗律とか大乘戒とか色々の傳來もあることなれど、我が曹洞宗は他門と違ふて、佛祖正傳嫡々相承面授口訣の法門と有つて、毎度申す如くに釋迦如來から迦葉尊者、迦葉尊者から阿難陀尊者、其れから其れと二十八代傳はつて達磨大師、其れからまた二十三代目で釋迦如來から五十一代の御相續が我國の高祖承陽大師、其れ後一系聯綿と今日にまで傳はつた懺悔の法門、佛祖憐みの餘り廣大の慈門を開き置けり、是れ一切衆生を證入せしめんが爲めなり。



と仰せられてある佛と云ふは釋迦如來祖と云ふは西天東土嫡々承の祖師方のこと、一切衆生が無始劫來の惡業煩惱に引き附けられて惡道苦趣に落つるの外は絶えて遁るゝ路の無いのを佛祖の慈悲の有り難さには誰れも彼れも入り易いやうにと、廣大の慈門をお開き成されて下しをかれた廣大と云ふは廣く大きく、慈と云ふは即ち慈悲門と云ふは吾々凡夫がコゝから通ることの出来るに譬へて門とお名けなさせられた廣く大きい御門で有るから一切衆生誰でも通れる、トは云ふものゝ人間世界の木や石で造つた門でも無用の者は入る可からずとか、印鑑が無くては通さぬとか、其れゝ規則が設けてある、佛祖廣大の慈悲の御門は、ドウして通つたもので有らうぞ、唯々深く因果の道理は毫釐ほども昧ますことのならぬことを歸らめ、佛祖の仰せに露ばかりも虚妄不實は有らせられぬと篤く信じて、仰せのまゝに懺悔の法さへ行

なひ濟ませば、彼の三時の惡業報必らず感ずべしと雖も懺悔するが如きは重きを轉じて輕受せしむ、又滅罪清淨ならしむるなりとある。三時の惡業報と申すは、この前の席で吳々お話いたして置いた順現業と順次業と順後次業との三つのこととて、此世の惡事が種に成て此世で苦む者もあれば、未來に業報を受くるもあり、又其次の世に成て苦難に沈むも有らうけれども、今日コゝで懺悔をすれば、其業報が忽ち消えるゾと仰せらるゝ懺悔と申すことは天竺の詞で懺摩と云ふのを、漢語に譯せば悔過と云ふことになる、悔はクエル過はトガと云ふ字で、即ちトガをクエルと云ふことになるのを、天竺の本の詞と漢語に直した詞とを一字つゝ取て懺悔と名けたので有るが、其意味を分りよく申せば、毎度お話する通りア、是れまでは惡かつた無始劫來の罪過が積み重なつて居るに違ひない、サテゝ恐ろしい事であつたと眞實本心から思ひ諦める



こととて、自分で自分の罪過を確かに承知することとや。一昧天竺の  
 詞で、懺悔と云ふのは、忍と云ふ意味を含んで居て、平たく申せば悪  
 かつたから勘忍して下さいと云ふ心持の詞である。と申すこととて  
 す。サテ其懺悔の一念が三時の悪業報を打消して仕舞ふことは、譬  
 へは種々様々の雜物を澤山積重ねて有つて穢ない所へ、一發の取  
 裂彈をドントと打掛れば忽ちパツと燃えて仕舞つて後は奇麗清  
 淨になるやうなもの。『普賢觀經』と申す經には其様子を説せられ  
 て「衆罪は霜露の如く慧日能く消除す」と仰せられてある。衆罪と云  
 はモロ／＼の罪過霜露と云ふは霜や露のこと、慧日と云ふは智慧  
 の日輪と云ふこととて、ア一悪がつたと思ふ心は佛祖の智慧の一分  
 を悟り得たので、其智慧の光明は旭日のキラ／＼と昇るのと同じ  
 有様、朝顔の花などに朝露の溜つて居るのを日が上つて來てチラ  
 リと照されれば直に乾いて仕舞ふやうなもの。ソと云ふので、慧日

能く消除すと仰せられてある。サテこの懺悔といふことは吾國で  
 も昔は盛に行はれたものであつて、淳和天皇の天長七年十二月即  
 ち明治三十三年より千七十一年前の十二月始めて宮中に於て三  
 千佛名會といふ者が行はれた。これは一年中に造つた罪過を十二  
 月の末に至つて過去、千佛、現在の千佛と未來の千佛これを三世  
 の諸佛といふ、その三世の佛の御名前を一人唱ひては一拜つゝ御  
 拜をして、自分の罪過を懺悔するといふ式で御座います。今年中犯  
 した罪過は今日唯今三世諸佛の前に於いて残らず懺悔致します  
 といふて懺悔して罪過に汚れて居る軀を清淨にして芽出度新年  
 を迎へると云ふわけである。それより畏くも天皇陛下より天下一  
 般に勅令あつて、百官百僚は申すに及ばず下庶民に至るまで、佛名  
 を唱へて皆々懺悔致せとの仰せが有つた。かやうな有様で五六百  
 年といふものは、上朝廷におかせられても下民間においても必ず



この佛名會といふものを行ふて一年中の罪過を懺悔するといふことになつて居つたから、その時代の歌の書いた書物を見ると、佛名會といふ題が大層詠んで有つて、大政大臣藤原良經公の歌に、「一年のはかなき夢はさめぬらむ三世の佛の鐘の響に」といふがある、この歌は噫、一年は夢の様に暮して、なんともわけが分らずに送つて仕舞つたが、今此の佛名會の鐘の響で夢幻で犯した罪も迷の夢も覺めるといふ意である。又歌に於いては名高い紀の貫之の歌に「年中に積みたる罪はかきくらし降る白雪と共に消えなん」とある。頃は十二月であるから雪が降る、その雪も春になれば自然に消えて仕舞う、丁度その如く、一年中の罪過も此の佛名會で懺悔すれば、此の白雪と共に消えて仕舞うといふ意である。それから彼の菅原道真公は非常な佛法信仰家であつて、毎年々の末には佛名會を行はれたが、とりわけて仁和四年十二月道真公四十四の年には、

七言四十四句の偈を作つて佛名會を行はれたかやうな有様で上下一般に懺悔が行はれてあつたが、足利氏の中頃よりして天下は殆ど眞黒闇になつて行政組織も亂れ君臣の大義も亡びて仕舞ひ、其眞黒闇の世の中に迷の闇を照す佛法も共に廢つて仕舞たのであるが、兎に角昔しは盛に懺悔といふものが行はれてあつたに相違ない。然るに其の懺悔の功德に就いて、重きを轉じて輕受せしむると「滅罪清淨」との二つがある。重きを轉じて輕受せしむるといふのは百圓借りた金を二十圓か三十圓にまけて貰うやうなもの、滅罪清淨といふのはソツクリ證文を巻いてもらうやうなもの、根きり葉きり罪業を帳消しにせん限りは中々あとが案じられる。ソコで吾が宗の懺悔の法は二儀兩懺ありと雖も先佛の護持したまふところ、曩祖の傳來したまふところと申して即ち滅罪清淨の方であるから、懺悔が濟めば、既に身口意の三業を淨除して大清淨



なることを得たりといふてある彼の忠臣蔵の芝居で鹽谷判官といふは播州赤穂の城主淺野内匠頭長矩の事で家老大星由良之助といふは大石内藏之助義雄の事であるがその淺野内匠頭殿の足輕に寺岡平右衛門といふ實名は寺阪吉右衛門といふはこの外貧乏にて大勢の家内であるから日々の煙さへも立て兼ねて日夜の心配一方ならなかつたある時西國の御領地があつて其の年貢米の支配役に當つて勤める内貧の盗みに戀の歌といふやうな理由で不圖出來心が起り此の澤山なる俵米の中二俵や三俵どうしたとて知れまいと思つたが不覺船に載んで我が家に運ぶ處を見つければ其の儘繩に縛られて牢に入れられた處がもと貧より起つた盗みてあるから吉右衛門は頻りに慚愧の心が起りア、悪いことを致して濟まなかつたどのやうな御成敗になるかも知れぬが兎に角かやふな心になつたのは自分の過であつたからこれから

心を改めねばならぬと心の中に懺悔を致して居りましたスルト一年程たつてから内匠頭江戸より歸城になり諸役人評議をなし、年貢米は云はば殿の御命を繋ぎ多くの御家來を養ふところの御家第一の物であるその御家第一の物を盗んだ罪科は中々重いによつて討首と評決になり此の旨家老大石より内匠頭へ申し上げたところが内匠頭は吉右衛門が盗取つたは何程じやとお尋ねになるから大石は御藏米三俵舟に載み取つたのは明白に白状仕りましたにより罪科の評決致し明日成敗仕りますと申し上げましたスルト内匠頭は賢明なる君であつたから子が考ふる仔細があるから吉右衛門を引き出せと仰せあつたによつて大廣間の庭に引き出された吉右衛門は一年餘も入牢致して居つたこと故骨と皮になつて瘦せ衰へ面目ないやら恐しいやら涙を流し總身は冷汗ぬぐひもやらずして平伏して居るこの躰を見られて内匠



頭、吉右衛門面を上げと辭をかけ、恐るゝ上げる面体に充分前非後悔の色顯はれたるを見て、側なる役人に向つて、吉右衛門は家内何人慕して居る、又扶持は何程にて、勤めは何日勤めるぞと、御尋ねになるから、役人は左様で御座ります、祖父祖母に兩親と小供三人に夫婦と都合九人の家内で御座ります、御扶持は御定りの金五兩と三人扶持で、勤めは月に三日の休みて、其餘は詰切りで御座りますと、御答をする。スルト内匠頭が仰せらるゝには、三人扶持は一日が玄米一升五合、それで九人の命は繋げまい、女房は四人の老人や手足纏ひの小供がある故思ふ様に稼は出来ず、自分は奉公に身を使はれて居るから生計が立ち兼ねる、三俵盗んだのは尤じや、今度命を助け九人扶持にして遣せと云はれたから、役人は大いに驚きまして、それは滅相なこと、あの罪人を其の様なことになされては、御領分の政道が立ちませぬと申しますと、然らば吉右衛門の

身代りに予が切腹致さうと云はれたから、役人はそれほどまでに思召す事なれば、御意の通りに仕りませうと申して、庭に下りて吉右衛門に向つて、コレ吉右衛門能く承れ、此度其方罪科によつて討首に處せらるべきの處、殿様格別の思召を以て命を御助け下され、其の上六人扶持の御加増あり、九人扶持を下されて、是れまで通りに勤める様との難有嚴命であるぞと申し聞せましたれば、吉右衛門は夢かとはかりに打ち喜び、斯る大罪人を御助け下さるゝのみならず、御扶持まで御加増なし下さるゝといふは、何たる難有い事であらふと、殿様の御慈悲が身に染みわたり、偏に奉公大事と勤めて居りましたが、後敵討の時にも四十七人の數に加り、後世まで譽を殘し、した。本來は一味連判の時も足輕不肖の分であるから、退いたからとて誰れ笑ふ者もないけれども、命を助つて加増まで頂いた大恩がある故に、一番に血判し命を捨てて恩を報したと申す



ことじや、吉右衛門は實に自分が悪るかつたと内心に懺悔し、その懺悔が顔色にあらはれたによつて、死すべき命を助かり扶持加増の恩命に預り、遂に君恩を報じて末代まで忠臣の鑑になつたのじやが、御互が過去久遠劫より積りくし罪業も、一旦悪るかつたと發露懺悔したならば、一時に消滅して清淨の身となり、昨日に變る大安樂の境界になるは疑いないことじやほどに、懺悔受戒の滅罪入位、發願行持の利生報恩、ねてもさめても忘れぬやうにするが肝要。

○參考

- 人誰か過なからむ、過ちて能く改むる善これより大なるはなし。(玉耶經)
- 前身惡を作くるは雲の月を覆ふが如く、後心善を起すは炬の闇を消するが如し。(經律)

- 若し能く法の如く懺悔せば、有らゆる煩惱悉く皆除く、懺悔は能く三界の獄を出づ、懺悔は能く菩提の華を開く、懺悔は能く佛の大圓鏡を見る、懺悔は能く寶所に至る。(觀心地)
- 智者に二あり、一は諸惡を造らず、二は作り已て懺悔す、愚者亦二あり、一は罪を作り、二は覆藏す。(涅槃經)
- 百年の垢衣も一日に於て鮮淨ならしむるが如し、是の如く百年千劫中集むる所の諸の不善業は、佛法の力を以ての故に、善順思惟せば、一日一時に於て盡く能く消滅せしむべし。(大集經)

○何事もむくひの罪はあるものを (空也上人)

身を捨て、こそほとけとはなれ

○三世の佛みちびく御名を聲にたて、 (慈鎮和尚)  
この一年の罪ぞきえぬる



○はかなくぞみよの佛と思ひける

(千載集)

わが身一にありとしらずて

○しばしこそ人の心に濁るとも

(新後撰集)

すまてやむべき法の水かは



第八節

然あれば誠心を専らにして前佛に懺悔すべし。恚麼する  
るとき前佛懺悔の功德力我を拯ひて清淨ならしむ。此  
功德能く無碍の淨信精進を生長せしむるなり。淨信一  
現するときは自他同じく轉ぜらるゝなり。其利益普ねく  
情非情に蒙らしむ。

前回には修證義の第七節でザツと懺悔のお話を致して置いたこ  
とて有たが、其れに引き續いて今日は修證義の第八節じや。この一  
節が自づから三段に分れて、先づ第一に誠心を専らにして前佛に  
懺悔すべしと仰せられるのは、懺悔するに就ての心得かたじや。吾  
が宗の懺悔は理事の兩懺と云ふ中にも、事の懺悔と申すので有る  
から、先佛纓祖の傳來あらせられた儀式を行なふのが最も肝要で  
は有るけれども、其儀式が本の虚儀徒式と申すやうな俗に云ふお



儀式だけと云ふことに成ては何の所詮もない。ソコで誠心を専らにするに云ふことが何より大切なることになる。誠心と云ふはマコトのコ、ロと讀む字で、信心と云ふも同じことでは有るが「觀無量壽經」と申すも經に、三心と申して信心を三つに分けて説かせられてある。第一が深心、第二が至誠心、第三が回向發願心と申すので、其第二が即ち此誠心と云ふので御座る。誠はマコト誠實と續いて少しも虚偽りの無い心。ア、是れまでは悪るかつた、無始劫來積り積る悪業煩惱幾たび地獄や餓鬼を経廻つても果たし盡すことは出來ぬて有らう。其れとも知らずに今まではウカ／＼として、其日の利欲や名聞にばかり心を奪はれ罪を罪とも思はなんだ耻かしさよ、業を業とも知らなんだ怖ろしさよと、誠實心底から懺悔する氣になるのが誠心じや、其れも色々な餘處事を考へるやうなことはならん。少しも餘處心を雜へずに懺悔三味の心になること

とを専らにしてと仰せられてある。此事も「觀無量壽經」に四修と申して四通りの行ひかたを説かせられて、第一に無間修、第二に無餘修、第三に恭敬修、第四に長時修とある中の無餘修と云ふのが此誠心と云ふ字に當る。無餘と云ふは餘の事を雜へずに其事ばかりになることじや。サテ其通りに誠心を専らにして前佛に懺悔すへしと仰せらるゝ前佛と云ふは過去現在の十方諸佛實は懺悔の儀式として過去現在ばかりで無く未來の諸佛までをも禮拜して南無三世諸佛と唱へるのが規則であるが今は略して前佛とばかり仰せられたものと見える。是れも小乗の出家方などが比丘戒を犯して罪を懺悔するときなどには、人前懺悔と申して出家仲間同志の目の前で某甲は此れ此れの悪い事を致して誠に耻入ります、就ては法に依て懺悔を行いますと云ふやうに、裁判所へても引出された同様の仕方もあるそうであるが、吾が宗の懺悔の法は人間



同志の目の前で其罪過を白状せよとは仰せられぬ唯々三世の諸佛に對して無始劫來の罪業を一經めに懺悔するまでの事じや然るに此に就て能く心得ねばならぬことは人間同志ならば欺むくことも出来もしやう申しわけをする工夫もあらうが三世諸佛に對しての懺悔に於ては露ほども欺むくことがドウして出来やう何と申しわけの仕やうが有らふぞソコテ愈々誠心を専らにすること肝要じやサテ其誠心を専らにして懺悔すれば如何なる功德があるぞと云ふに是れから此一節を三段に分けると云ふた中の第二段で懺悔の功德を説かせられるのぢや其功德が又二つに分れて一つは我れと自から自分を救ふて無始劫以來の罪過を奇麗サツパリと滅ぼし無くしてしまふソコを「前佛懺悔の功德」我を拯ひて清淨ならしむ」と仰せられてあるサテ又懺悔の功德力は唯是れまでの罪過を奇麗サツパリと滅ぼすばかりでは無い

其の上に此功德能く無碍の淨信精進を生長せしむるなり」と仰せられて限りもなく都ての事に差支のない美しい信心が起る其れが即ち無碍の淨信じや精進と云ふはクハシクス、ムと讀むので精を出して勉強すること何を勉強するぞ無碍の淨信と云ふ美しい心を勉強して生長させる是れが則ち取りも直さず受戒のことしや受戒といへば三聚淨戒とか十重禁戒とか簡條立をしたこととばかり思ふ人もあるで有らうが其三聚淨戒や十重禁戒を一經めにして其精神と云ふ所を一口に申せば則ち無碍の淨信精進で美しい誠の心を怠らす勉強すると云ふことになるソコを毎度申す通りア一是までは悪るかつたと思ふ懺悔の心と必らず一緒に是からは決して悪いことを仕まいぞと云ふ持戒の心が起ると申すのです次に第三段目に移つて淨信一現するとき自他同じく轉ぜらるゝなり」と仰せらるゝ是れか直に發願利生の委じや淨



信一現と云ふは、美しくしい誠の心が一度あらはれて來ればと云ふ意味であるから、前に申した通り懺悔の功德に依て受戒が出來れば、則ち諸佛の位に入て最早や凡夫ては無い、眞に是れ諸佛の子なりと有て譬へば天子様のお嫡男とお生れなされた御方は、お年こそ往かせられんでも、オギャ〜と泣かせられる其儘が既に一天萬乗の君の皇太子じや、四千萬人を誰彼と云ふ隔てなく臣民としてお愛し下さるゝ所のお徳がお生れつきに備はせられて有る如く、吾々お互ひも無碍の淨信が一現すれば自分だの他人だのと云ふ差別はない、盡十方法界の生とし生ける者、一味平等に其利益に預かる生とし生けると云ふても人間だの畜生だのと云ふ活物ばかりてはない、普ねく情非情に蒙らしむと有て、山川草木石瓦に至るまで、皆その利益を蒙むるぞと仰せられる譬へば一人の心に悲しいことが有て泣き哀しむとして見れば、其人の爲めには月の皎

々として澄み渡つて麗はしいのも、花の咲き匂ふて鮮やかなるのも、皆悲みの種に成る。ア、去年の今頃一人娘を連れて花園へ遊びに往たとき、彼の子が欲いと言て買て來た此花が、今年も去年の通りに美しく咲いたけれども、彼の子は去年の暮に死てしまつて此花が形見と成た形見こそ今は仇なれ此なくば忘るゝ隙もあらましものをと古人が詠まれたのも思ひやられると云ふやうなことにもなる。然るに之に引かへて、一人の心に嬉いことが有れば、善の願んだのも可笑いと俚諺もある通り、妖怪の出そうな枯野の夕立にあふても、それが却て面白いと云ふことにもなる。東京千住より一里ほど離れたる在に、佐藤孫兵衛といふ者があつたが、其の村でも相應の財産もあり且つは性來實躰であつて、その上讀み書きから算術も出来るものから、御一新の初めの頃、戸長の役を勤めて居たが、職務に力を盡くして怠らず、又下々の者どもを慈しんでやるか



らして、近在まで評判する位であつた。この孫兵衛は兩親の外にキ  
ンと云て、誠にをとなしの氣質の女房と、カヨといふ娘と都合五人  
の家内に下女下男を使ふて、何不足もなく一家和合して睦じく暮  
して居た。然るに或る時戸長達の親睦會が千住の町で催されたか  
ら、役柄のことゝて孫兵衛も交際であるから其の宴會に出席した  
のはよかつたが、孫兵衛が日頃勤直の質であるところから、同役の  
一人が、何と今夜は佐藤を連れ出さうてはないかと云へば、それは  
よからふと一人が合槌を打ち、遂に嫌がる孫兵衛を無理に連れ出  
して千住の貸席扇屋といふに上り、孫兵衛にはおタマといふ女を  
當てがうて、その夜は面白く遊んで各自家に歸つた。しかるに是れ  
まで謹直一方の孫兵衛は翌日より彼のおタマの事を忘れかね、竊  
かに家を出ては扇屋に往きて放蕩を逞に致して居たが、次第に逸  
樂に溺れて今は役場へも出勤せず、吾が家にも歸らずして、五日六

日と居續する様になつたので、兩親や女房は申すに及ばず、親類友  
達も一方ならず心配して種々と異見を致すなれども、日頃の本心  
を失ひ迷ひ込んだる孫兵衛は馬の耳に念佛で少しも受けつけな  
いから人々も持て餘して今は誰有て手をつけるものがなくなつ  
たのを、當人はよい事にして頻りに通ひ詰めて居るから、ソロ／＼  
所有田畑諸道具を賣りこかして其の費用にする様になつた。サ  
こうなると破れかぶれといふ氣になるもので有るから、孫兵衛は  
益す放蕩を盡くして、遂に家屋敷をも質入なして仕舞、年寄の兩親  
は離座敷に閑籠り、母家の門はシメ切つて中には女房キンと娘の  
カヨの二人で留守をして居るといふ有様。或る日カヨが離座敷の  
入口に立つて居ると、老人夫婦の話に、サテ孫兵衛が放蕩を止めさ  
するには致方がないから、扇屋のタマとやらを身受して女房とな  
し、嫁は不憫ながら親里に歸すより外はあるまいとの相談であつ



たから娘の力ヨは大きに驚きさて情ない事になつたものである。母様が里に歸られ扇屋のタマとかいふ女郎がその代に此の家に來たことならば如何なる愛さめを見ることであらうか、この事を母様に知らしたならば、どの様に心配をなさるであらふ。又この事を私がいふたと知れては祖父様祖母様にどのやふに叱らるゝてあらふか、ア、困つた事になつたものであると暫の間獨り心を痛めて居ましたが稍あつて心付、そうじゃそうじゃ、叶はぬ時は神佛に御助を受けるより外に仕様はない、それには此の奥山の觀音様は靈驗あらたかなりと聞き居れば、これに祈願するに若くはなしと心を定め、その夜母親が晝の疲れに熟睡をして居る間に、ソット臥床を脱け出て、草木も睡る牛の刻といふに寢衣の儘に素跣で、半里餘の山路を獨りたどりて、かの觀音堂に赴き、楓葉の様な小さい手を合せ、南無大慈大悲の觀世音菩薩、父母孫兵衛が不圖したことよ

り一家の難儀、かゝる愛目を見るも宿世の罪業ではありませうが、只今茲に懺悔いたしまするほどに、父の改心致する様に御加護を受けたり存じますと、一心に祈念を致して人知れず歸り、翌日になれば素知らぬ風をして居り、夜になれば又も參詣するといふやうにして、已に七日目即ち満願の日となりましたれば、その日より娘はハタと衰弱が出て急に容体が悪くなつたから、母親は大いに心配し、娘の睡入た暇を見て、獨り走つて扇屋に赴き、夫孫兵衛に斯くと知らせましたから、孫兵衛も驚いて空を飛んで我が家に歸つて見れば、娘は弱りキツテ睡つて居る。ユリ起して持ち歸つたる羊羹を出して與へた。スルト娘は只難有御座ますと禮を述べたさりて、一口も食ひませぬから、孫兵衛は忽ち怒り、日頃好きな此の羊羹、何故一口も食はぬぞと、さびしく問ひ責められて、娘は起き直つて兩手をつかへ、今は何をか包み申しませう、實は斯様くと年寄夫婦



の話より、奥山の観音へ七日の牛刻參を致し、而も夕食だけの斷食を誓つて、今夜はその満願なれば折角の御馳走なれども頂きませぬから、何卒御免しなされてくだされと申しますと、今まで怒つて居たる孫兵衛總身に汗を流し、兩眼に涙を浮かべ、さてく左様にあつたるか、我れが不心得より、年齒もゆかぬ其方にまで箇様に心痛をかけたるか、ア、今までは迷の雲に覆はれて、あらゆる悪業を働かし、今日只今迷の夢はサツパリと醒めたゆえ、此の後は誓つて改心致すべし、是れといふのも、其方が眞心が観音菩薩に感通し、観音様が其方の身にのりうつり、この孫兵衛に御諫言くだされたのである、これぞ偏に菩薩の靈驗かなと、打つて變つたる孫兵衛の容子に、娘も女房も嬉し涙に咽びました。翌日孫兵衛は奥山の観音に參詣して、今迄の不心得を殘らず懺悔し、將來の改心を誓つて歸り、以前の如く謹直に家業を勤めるやうになつたから、數年の内に

本の身代にねぢもどし家内睦じく暮すやうになつたといふことじゃ、かやうに淨心が一たび現れるといふと、自分一人てなく家内一同が楽しくなるのみならず、今までは人手に入居て、見るも悲しみの種となつて居たる庭内の草木まで、か再び自分の手に歸つたから、一々笑顔をするやうになつたといふは、ナント嬉しいことではあるまいか。元來宇宙の萬物に喜びの種もなければ、悲しみの種もない、此方の心の置きところ一つで、日月も光を失ひ、頭も光明を放つ、吾々の心が無始劫來の罪過に穢れ腐つて汚なくあれば、世の中に有りとも有ゆるものが皆穢れる、吾々も互ひの心さへりとも有らゆる一切萬物みな其儘に美しくしい、サー斯う成てさへ來れば、百姓衆が鍬鎌を手に取るまゝ、商人衆が牙籌はぢく其まゝにする事なす事すべて皆發願行持の利生報恩となる。



○参考

○佛阿難に告げ給ふ若し衆生有つて諸佛の所に於て一たび信心を發せば是の如きの善根終に敗亡せず(泥洹經)

○若し士夫有つて諸の善法に於て信心清淨なれば是れ則ち退かず

(雜阿舍經)

○信を得るを衆樂の因となす無上の信心を發せば能く無量無數衆生の諸の煩惱の病を滅す(華手經)

○信は道元功德の母たり一切諸の善法を増長し一切諸の疑惑を除滅し無上道を示現開發す(華嚴經)

○石川やせみの小川の清ければ

月も流れをたつねぞすむ

(鴨長明)

○たのむぞよ五つのさはり深くとも

捨てぬ佛のちかひ一つを

(微安門院)

○我がこゝろ池水にこそ似たりけれ

濁りすむこと定なくして

(源空上人)





第九節

其大旨は願くは我れ設ひ過去の悪業多く重なりて障  
道の因縁ありとも佛道に因りて得道せりし諸佛諸祖  
我れを憐みて業累を解脱せしめ學道障り無からしめ  
其功德法門普ねく無盡法界に充滿彌編せらん哀みを  
我れに分布すべし佛祖の往昔は我等なり吾等が當來  
は佛祖ならん。

只今讀み上げたのは修證義の第九節で前節に誠心を専らにして  
前佛に懺悔せよと御教下された其懺悔の心得方を更に説き分け  
て御示し下された御文である世界は廣く人間は多い文明國の人  
民であるとか野蠻國の夷であるとか又は富貴だとか貧賤だとか  
利口だとか馬鹿だとかいふもの、同じ人間仲間て彼れの此れの  
と極めたことは誠に價値の無いもので馬鹿も利口も文明も野蠻

も佛祖の御目から御覽なされば同じ相場で高低が無いナゼかと  
申すに人間の考へて文明だの野蠻だのと申すのは只一生の間衣  
食住に不自由なく身體が丈夫で出来るだけ長生でもすれば其れ  
に増した幸ひは無いと思ふまでのこと其だけの都合の好悪して  
貧賤とか富貴とか分け隔てをするまでのことで見れば其れて人  
間に生れた甲斐があるとは申せない人間ひと通りの教である  
云ふてある孔子の教でさへも朝に道を聞いて夕に死すとも可  
なりと云ふてある午前に道を聞くことが出来たなら午後死しても  
苦しくないといふこととや道を聞かぬうちは何百年長生しても  
何の所詮が有らうぞい富貴で利口で野蠻國の民でさへ無ければ  
其れで宜いとは孔子でさへも云ふて無い況して人間天上を超脱  
して佛菩薩の位に昇らうと云ふ佛教徒が只世の中に有り觸れた  
文明だの野蠻だのと云ふことばかりに心を取られて一生虚しく



過ぐして濟まうか片時も早く道と云ふことに心を懸ければならぬ然しながら只に道とばかり云ふては人には人の道があり天上には天上の道があらふけれども今コゝて道と云ふのは佛の道じや佛の道を得られんては佛教徒と成た甲斐が無いばかりでは無い切角人間に生れた所詮も無い然るに過去の悪業さへ多く重つてあるものは其業報が深いに依てトカク其道に障りが出来て切角人間に生れた甲斐もなく遂に佛祖の大道を聞くとさへも出来ぬのが多い舍衛の三億と申して昔し釋迦如來が天竺の舍衛城で御説法なされた時其城中に三十萬人の人が有たけれども其中で親しく御説法を拜聴したものは僅に十萬人しか無い残りの二十萬人のうち十萬人は釋迦如來の御化導があると噂には聞て居ながら遂に一度も参拜もせず又其残りの十萬人は釋迦如來と云ふ御名さへ聞たことが無くて仕もうたとある親しく佛祖の大道を

聴聞すると云ふことは並大抵な果報では無いに若しも過去の罪業が障りと成て一生空しく過ぐすやうなことが有ては實に多生の遺憾であるから我より先きに佛道に因て得道せられた十方諸佛謂ゆる前佛の憐みを受けて道の障りとなる悪業の累ひを解脱させて戴だきたい其れのみならず過去の諸佛が生々世々に積せられた諸々の功德も修證したり解脱したりせられた一切の法門も無盡法界と限りも無い十方世界に充滿彌綸とミチくである大慈大悲の哀みを皆御分布と御分ちなされて下さりませと願ふのじや誠にハヤ無常遷流の世の中であるからイツ何時に如何なる業報が顯はれて来て虚しく死出の山路にさまよひ冥きより冥きに入て浮ぶ瀬が無いかも知れぬ先年の戦争で國の御爲め天子さまの御爲めに命を殞した人も多く有らうが其中で或は深手あるひは淺手傷を受けただけで命には別條が無いと云ふやうな人



達は廣島あたりの病院で親切盡した療治を受け、モハヤ近いうちには全快と云ふので、自分も喜び其れを聞いた親や兄弟または妻子の大喜びはドンなで有らう。而も其れく其故郷に近い病院へ送られると云ふことに成て、過る明治廿八年七月二十四日に廣島から瀛車に乗た人たちが三百何十人有たと云ふ、東京の病院へ移されれば家へ歸れんでも親兄弟に逢ふことが出来る、仙臺まで歸れさへすれば面會も出来やうと喜び勇んで待て居た女房子も有たらうに、其夜に限り非常の大風、二十幾輛と云ふ瀛車を引く機關車が海の中へ吹き飛ばされて行衛が知れず、其れに引かれる瀛車のことゆゑ將基倒しに顛覆したのが十三輛、即死もあれば重傷も多く、實に未曾有の大變じや、誰一人として斯んなことが天から降て来るやうに湧き出さうと思つたものが有らうぞ、無常とも轉變とも申しやうもない次第、其當人は申すまでも無く親兄弟や妻子

の悲みがドンなで有らう。イツソ戰地で打死と云ふならば諦らめやうも有つたものと、返らぬ愚痴をこぼすのもサラく無理とは思はれぬが、是れに就ても、あすありと思ふ心のあだ櫻夜るは嵐の吹かぬものかはと古人の詠まれた歌の通り、一日片時も油断はならぬ、急いで懺悔滅罪し早く入位の身となつてイツ何時にドのやうなことが有ても、ア一殘念なと云ふやうなこと無いやう心懸るが何より肝要じや。サテ此御文の結末に、佛祖の往昔は吾等なり、吾等が當來は佛祖ならんと仰せられて有る、此御一言が誠に肝要な中の肝要な御言葉じや。これは『梵網菩薩戒經』に汝は是れ當成の佛なり、我は是れ已成の佛なり、是の如きの信を成せは戒品既に具足すと御説きなされて有る御言葉を其儘我々の方から佛祖へ申しあげるのて、修證義三十一節の全文が只この二句に皆ともつて居ると申しても宜しいほどのことであります、其れ故に委



しい御話をしやうと思ふては、一朝一夕のことでは無いが、三世の諸佛も其本は吾々と同じ凡夫て有た然るに懺悔滅罪受戒入位で、今では佛祖と仰がれて御座るが、吾々とても今こゝで滅罪入位的身となつて、利生報恩の行さへ出来れば、やがて諸佛と同様の身と成ることゆゑ、其處の道理を固く信じて疑がはぬ、其一念に戒品ととどく具足すと有て、三聚淨戒も十重禁戒もソツクリ籠つて有るぞと仰せらるゝ、其の因縁は少し違ふけれども、昔し平の清盛といふは太政大臣の位に上り、自分の娘を天子様の后妃にさし上げて居たところより、大層に驕を極めて居たが、その頃京都に祇王祇女と申す美しい白拍子が居て、姉の祇王はとりわけて姿も美しく、蕤もよいといふので、清盛の寵愛を受けて、西八條の邸に抱られて居りました。然るに加賀の國より又一人の白拍子が上つて來まして、その名を佛御前とふて、年も若く今様の歌から舞の手まで祇

王よりは一層よいといふので、京洛中の大評判でありましたが、一日西八條の邸に參つて清盛に遇ふと致した。しかるに清盛は祇王のあるに誰が來やうとも用事はない、疾く追ひ出せよと罵りつけたのを、祇王が之を聞いて、その様にモキドゥに仰せ玉はずとも何か一曲奏てさせ玉へと申したゆゑ、清盛も然らばといふて佛御前を通して一曲を彈せ、今様を歌はせたところが、姿容といひ音聲といひ、祇王より一段よろしいところから、清盛は遂に佛御前に心が移り、祇王に暇を遣りました。祇王はさて、情ない仕打とは思ふたなれども、如何に詮方もなく、障子に萌え出づるも枯るも同じ野邊の草いづれかあきに遇はて果つべきといふ歌を一首書きのこして、我が家に引きさがり、餘りの哀しさに死なうと思ふたなれども、母の切なる諫に思ひ留つて居る内に、清盛の許より佛御前の徒然を慰むる爲めに邸に來て、今様なりと歌へとの命があつ



て祇王は已むなく參つてみれば、コチラへと奥の間にても通さるゝことと思ひの外、遙か下の方に坐らせられて佛御前と同席もならぬ口惜しさに、胸もはりさくるほどの思をチツと押へて早く歌へくとの言葉に佛も昔は凡夫なり我等も遂には佛なり同じ佛性具する身を隔つるみこそ悲しけれといふ今様を歌ひましたれば、満座の人々感涙に袖をしぼらぬは無かつたと申す。サテ祇王は斯くてあらばこの後又如何なる憂目に遇ふも知れぬと思ひ妹の祇女と母と三人一時に黒髪を截つて尼となり、嵯峨野の奥に引きこもり草の庵を結んで念佛三昧に日を送つて居りました佛御前は名詮自稱て佛縁の深い美人で有つたと見えて、祇王の今様や彼のいづれかあきに遇はて果つべきといふ歌を思ひあはして、其の年の秋の暮に、窃に西八條の邸を逃げて嵯峨野なる祇王の庵を尋ねゆき、心の中を打ち明けて四人一處に念佛の身となり、目出度往

生を遂たと申すことじや、各々方は銚を落して墨染の衣に身をやつすに及ばぬが佛も本は凡夫で有つたに相違ない吾等も佛祖の道さへ得れば此身このまゝの佛であるといふことに合點がゆけば、いつも申す通り各々夫々の職業を勤めるまゝ仕る事爲す事然ながらの利生報恩かくてこそ人と生れた甲斐もあり佛法にもあふた所詮もあると云ふもの喜び勇んで佛子たるに耻かしからぬやう美しい世渡が出来ねばならぬ。

○參考

○佛法に入る者は信心の手あらば道法の寶を採取す若し信心なければ、空しく得る所なし(宗鏡)  
○佛は大醫王たり能く一切の病を救ひ玉ふも命盡くる者を救ふ能はず佛は能く一切の人を度し給ふも不信者を度する能はず蓋し信は



一念の眞誠なり。(王日)  
○信は常に大力あり、燈の能く闇を除くが如く、病に良薬を得るが如く、盲者の眼を得るが如く、貧人の財を得るが如し、水に漂溺せる人の如し、信を大船筏となす。(正法)  
○古佛未だ悟らざれば、今者に同じ悟り了れば、今人も即古人なり。(龍牙)

○照る月の心を水にすみぬれば

(千載集)

やがてこの身にひかりをぞさす

○濁りつる心の水に月ありと

(よみ人しらす)

たがまことより尋ねそめけん

○雲晴れてのちのひかりとおもふなよ

(佛國禪師)

もとより空にありあけの月

第十節

我昔所造諸惡業、皆由無始貪瞋痴、從身口意之所生、一切我今皆懺悔、此の如く懺悔すれば、必ず佛祖の冥助あるなり、心念身儀發露白佛すべし、發露の力、罪根をして鎖殞せしむるなり。

追々と席も重なつて懺悔の道理や、其功德は荒々お分りに成たこと、存ずるがサテ其懺悔の儀式と云ふことに就ては、佛祖正傳の儀軌と申すものが有て、本式の授戒の時には、教授師様から委しい御教誡もあることなり、且つ其道場の莊嚴、その外それは實際懺悔道場に這入たことのあるものでなければ、知れぬことと有るけれども、今讀み上げた修證義の第十節の御文が正しく其懺悔の儀式に唱へる御文で、其末の方に「心念身儀發露」とある六字が其儀式の大躰をお示しに成た御詞で、御座る尤も懺悔と申すことに就ては、



毎度お話し致す通り諸宗各派に色々な傳も有つて儀式も一樣ては無いやうすて有るが、摘んで申せば理の懺悔と事の懺悔又これに觀無生の懺悔など、申すことを加へて三通りに説く向もあるが、他宗他門の事は且らく置き、我が曹洞宗の懺悔と申すは其う云ふ彼れ此の名目にも拘はらず、只佛祖正傳の「儀軌」と申す御本の上にも二儀兩懺ありと雖も先佛の護持したまふ所、曇祖の傳來したまふ所の懺悔の文ありと仰せられて有つて謂ゆる心念身儀發露の三つが揃ふまでのこととて御座る。心念と云ふは即ち他宗で申せば理の懺悔と云ふやうなわけ、前回にお話し致した通り、誠心を専らにして、嗚呼是れまでは悪るかつた、容易ならぬ罪過が重なつて居ることとて有りましやう、サテ、耻かしいこととて御座る、イカにも怖ろしいこととて御座ると、心の底から染々と思ひ起すので、之を意業の懺悔とも申します。偕その次に身儀發露とあるのが、即ち

ち他宗で申せば事の懺悔と申すので、其中で身儀と云ふは身の上で行なふこと、發露と云ふは口に出して懺悔の文を唱へること、本式の授戒の時は必ず七日の間の加行を勤めて過去現在未來の三千佛を禮拜する其時に、掌を合せたり頭を下げたりして、身體の上にて懺悔の行ひをする、其れが即ち身業の懺悔、サテ又いよく發露と云ふのは、發はヒラクと訓み、露はアラハスと訓む字で、是れまで掩ひ藏して居た無始劫來の罪過を皆明け廣げて、佛祖の御前に白狀する、是れが即ち口業の懺悔、箇様なわけ、身と口と意の三つに別け隔てなく三業ひとしく懺悔するのが、謂ゆる佛祖正傳の儀式で御座る。然るに其發露の仕方、就ても諸宗に色々の差別が有て、其事も前にお話し致した通り、小乗の懺悔などでは人前懺悔と申すので、お互ひ人間同士の目の前で、而も其罪過の自分の身に覺えのあることを例へば、若い時分に箇様々な惡事を致したと



が有りませんが、今更後悔に存じますとか、昨夜飛んだ心得違ひを致  
しまして、斯々の破戒を致しましたとか、逐一其事柄を仲間の人の前  
で言はせるとも有るそう有るが、我が宗の懺悔は其うては無い、  
謂ゆる白佛と申すので、三世の諸佛に向て哀願懺悔する、其白状す  
る詞と申しても一々罪過を並べるわけでは無い、唯々我昔所造の  
四句の文を誠實信心を凝して唱へるまでのことじや、箇様に申せ  
ば何となく我宗の懺悔は樂なようにばかり聞えるかは知らんが、  
其うては無い、人間同士の懺悔なら、十のものを八つ位に申して置  
ても其れで済むかは知らんけれども、佛に向て懺悔するのは、一々  
其事柄を並べぬ代りに冥鑑照々として毫釐ほども味ますことは  
出来ん、且つ又小乗の人前懺悔は、其懺悔の時に言ひ露はした即ち  
白状したとだけだけの罪しか消えぬが、我宗の懺悔は無始劫來の罪  
根と申して都べての罪過の根から葉から悉く消滅させるのじや、

其れゆゑに尤も身口意の三業とも誠實を専らにせんければなら  
ぬ。サテ此我昔所造の四句の文は本と「華嚴經」の普賢行願品に出  
居るので、三世諸佛御相傳の懺悔の文であると承たまはる、其れ故  
に先佛の護持したまふ所、曩祖の傳來したまふ所と申して、無始劫  
の昔から造りと造れる諸々の悪き仕業は、皆無始以來すなはち限  
りの知れぬ昔からの貪欲と瞋恚と愚痴との三つが本に成て身と  
口と意との三つで色々の悪い業をしたので、御座る今更まことに  
慚愧恐怖の至りであるに依て、悉く懺悔致しますと云ふ意味じや、  
此中で無始と云ふこと、貪瞋癡と云ふことを少々嚼み碎いて御  
話せんければなるまいかと思ふが、無始と云ふことは始が無いと  
書てあるので、耶蘇教を始め儒者でも神道家でも、皆この無始と云  
ふことを知らぬに依て、天地萬物の始まりを無理に捜して見やう  
とするから、色々の不都合なことを説きたて、人を惑はせること



になるが、佛教では最初から天地萬物に始まなければ終りもないと申すので、委しいことは一座の説教の席などで到底申し盡すべきことでは無いけれども、當節は世間の學問が追々に開けて來て、空間や時間には限りが無いと申します。空間と云ふは虚空の間と云ふこととて、實に虚空には限りが無い、サテ其限りの無い虚空に充々である眞如法性にも限りが無い、限りの無い眞如法性が因縁次第に生滅去來と申して、出來たり潰れたりするのが、丁度天地萬物の出來たり潰れたりするのは、海の中に泡が出來たり潰れたりするやうなもので有ると佛は仰せられてある。泡の手前から見れば、出來た時には出來たに違ひなく潰れた時は潰れたに相違ないやうなもので、即ち始もあれば終りもあるやうに見えるけれども、一身に泡と云ふものには自分の實體はない、全く水の動いたり澄たりする間に、謂ゆる縁に依て起つたものであるから、其本身の水の上

から見れば始まなければ終りもない。然るに吾々人間は其泡のやうな身を以て、泡のやうな萬物に對して居りながら、何ぞ實身にてもあるものゝやうに思ふのであるから、氣に入たと云ふては欲しがつたり、氣に入らぬと云ふては厭やがつたりする。其欲しがるのが即ち貪欲の本で、其厭がるのが瞋恚の本じや、貪欲と云ふは、ムサボルと云ふこととて、物を妄りに欲しがること、瞋恚と云ふは、イカルと云ふこととて、妄りに腹を立つことじや、サテ箇様に氣に入るとか氣に入らぬとか、貪ほるとか、瞋るとか云ふ迷の起るのは、畢竟眞如法性の眞の相が分らぬからのこととて、手近く申せば、物事は皆因縁に依つて暫らく假りに出來たものであると云ふことの分らぬ故である。其れを愚痴と申すので、御座る世間で能く云ふこととてあるが、彼の婆さんは愚痴をこぼすとか、彼の男は愚痴な男だとか云ふのは、皆物事に諦らめの附かないものゝこととてあるが、其れも全く愚痴



に違ひない。因果の道理さへ信じられたなら、どのやうなことが起つて來ても諦らめの附かないと云ふはずは無いのであるが、畢竟因果の道理が分らぬに依て、物事に諦らめが附かない物事に諦らめが附かないからクヨクと返らぬことに繰り返して居ると云ふことになる。先頃故人になられた海舟勝安房は幕府の小さい麾下の家より起つて、徳川二百五十年の終局をつけた豪傑であることは、誰れも能く知つて居るが、この海舟の父といふは左衛門太郎といふて若い時には中々の放蕩もので、遂に幕府より譴責を蒙つて閉居して居られた。その閉居中に自分が以前の悪いことを知つて大いに懺悔したことが、その自傳の中に自筆の文でもつて、おれは此度も頭よりおしこめられてから、取扱ものどもをうらむだがよく／＼考へて見たらば、みんなおれが身より火事を出したと氣がついたから、まいばんまいばん罪ほろぼしには、ほけ經をよんで、陰

ながらおれにつらく當つたとおれが心得違た仁々は、りつしんするやふに祈つてやるから、其のせいにか、このころは、おれの體も丈夫になつて、家内のうちに、なにもさいなんもなく、親子兄弟とも一言のいさかひもなく、毎日／＼笑つてくらすは、誠に奇妙なものだと思ふから、子々孫々もこふしたらば、よかろうと氣がつゐた故に、ひまにまかして、折々思付た善惡の報ひ、よく／＼あぢはふべしと、かやふに書いてあるが、これが眞の懺悔といふものである。眞の懺悔さへすれば、自分の罪過はなくなり、自分の病氣も平癒し、家内一同むつまじく、毎日／＼笑つてくらさるゝ、この位結構な事はない。又昔し江戸の神田邊に、家は九尺二間のうら店鼠の巢を見るやふな住居に、亭主が三十四五女房が二十八九の夫婦に、子供三人都合五人て至つて、貧乏な生計をして居たが、亭主は四五百文の錢で大根を買ふて、江戸中大根／＼と賣りあるいて、漸く二百文の錢を取つ



て歸つて、米味噌醬油から油薪小供の鼻ぐすりまで支拂ふてゆき居つたが、中々難儀なことであつた。しかるに一日例の通、一荷の大根を荷ひ、朝早ふから賣りあるいた所が、どうした事やら其の日は一把の大根も賣れぬ。日ざしをみれば早や晝すぎ、腹の時計は二時さがり、財布の中には未だ一文の錢もたまらず。これはつまらぬ、此の大根が暮方までに七百文の錢にならぬと、忽ち釜の中に蜘蛛の巢がはる。どうしたらよからふと工夫しながら、いつの間やら兩國橋をわたり、本所の屋敷町を大根くんと賣りあるいた。或屋敷の表長屋の窓の内から、コレ大根屋と呼ぶやれうれしや、先づ知行にありついたらと喜びながら、門口に荷をもちこんで見れば、椽さきの障子をあげ、旦那どのが今月代をそられたと見えて、鏡たてに向ふて、自分髪をゆひながら、その大根は何ほどじやといふ。百に三把でござりますといへば、ソレハ高い廿四文、にしてあげといはる

る賣りたさはうりたけれども、現在損のたつ事なれば、ドウゾ三把にお買ひなされて下されい。今朝から江戸中を泣きあるいても、未だ一把も賣れませぬ。どうでも賣つて歸らねばならぬ。大根、かけ値は一切申しませぬといへば、かの侍はかぶりふり、それでもたかい、まからねば、夫れてよい邪魔ながら持つて歸れと云ひ捨て、椽前の障子をハタトしめた。大根屋は色々言ふてみても、かの侍が相手にならぬ。ソコテ仕様もやふもなく、ハテ困つた。もう日の入には間もなし、何ても七百の錢を持つて歸らぬと、親子五人が明朝の命がつながれぬ、なんとしたものであらふと、手を組んで思案しながら、椽先の銅盥にフット目が付いたから、ソツド水の入つたまゝで、大根二三把の下へかくし、荷をかつぎ出して、門口を出ようとすると、障子の内から、コレ大根屋と呼びかけられた。大根屋はぬからぬ顔で、まかりませぬといふと、イヤ、値はねぎるまい。その大根買ふ



といひさま障子をサラリト明けられた大根屋もびつくりしたが、  
 どうぞして遁げて歸りたいとおもひ、何把ほど入ります、はした賣  
 は出来ませぬといふと、イヤ／＼はしたては買はぬ、その大根みな  
 買はふ、此椽ささへならべて呉れといはれる。サー大根屋も一生懸  
 命障子のしまつてあるうちなら、銅盃の出しやふもあらふに、今更  
 銅盃が出されもせず、といふて賣るまいともいはれず、逃げてゆか  
 うにも荷を捨て、歸つてはならず、千百萬の後悔も間に合はず、う  
 ろ／＼として居ると、かの侍が大根屋の顔をキツト見て、其方はキ  
 ッウウろたへて居るぞよ、先づ銅盃から出して大根の敷をかぞへ  
 て見よといはる、大根屋は總身に冷汗を流して、今撲たれるか、モ  
 ウ切られるかと、ワナ／＼震ひながら、かの銅盃を耻しそくにソツ  
 と出して、土に手をつき、旦那様眞平御免なされて下されませ、何を  
 かくしませう、先刻も申します通り、今朝から未だ一文の商もい、

たしませず、此の儘歸りますと、明朝五人て食ます事がなりませ  
 ぬ。かなしい貧のぬすみ根性、面目次第も御座りませぬ。七ツをかし  
 らに子供が三人、どうぞ親子五人の命をお助けなされて下さりま  
 せと、色青ざめて土に頭をすりつけて詫言する。かの侍はおもひの  
 外氣だてのよい人で、更に立腹のけしきも見えず、いや／＼其の詫  
 言に及ばず、先づその大根の敷をよんでみよといはれ、恐／＼なが  
 ら大根を椽へ積み上げた處が二十三把、かの侍はやがて七百六十  
 四文の錢を取りだして、かの大根賣を呼んで、サー其方がいふ通り  
 に、二十三把で七百六十四文序に銅盃を添へて遣す、貧のぬすみと  
 言ひながら、其方の根性は餘程によぶれてあると見える。此の銅盃  
 は顔や手を洗ふ道具なれども、只顔や手を洗ふばかりで有るまい、  
 心の洗ひ様も有りそうなものじや、無禮は咎めぬによつて心の垢  
 を洗ひをとせと云ひ捨て、障子をしめて内にはいつた大根屋は



夢見たやうに有り難いやら耻しいやら禮もいはれず詮方なさに  
盃と錢とを荷の中に入れて、早々に彼の邸をにげ出で、はじめて生  
きた様に覺えたが耻しいと思ふ心が腹のうちに横はつて、ウツウ  
ツとして家に歸り、女房にも面目なげに此の始末をいぢぶ。始終話  
して共にスツカリ改心し、夜晝なしにはたらし、終に三年目には相  
應の八百屋になつて、はじめて彼の銅盃を侍の方へ歸し、厚う御禮  
を申して、此の邸の出入になつたと申すことじや、今一切衆生が無  
始劫來貪瞋痴の心の汚れが染つてあつて、知らず／＼に犯して  
罪過は、丁度彼の大根屋が銅盃を盗んだやうなもの、高祖大師が心  
念身儀發露白佛すべしと仰せらるゝは、丁度彼の侍が心の垢を洗  
ひよ、無禮は咎めぬと云ふたやうなものであるから、縦ひ身に盗み  
かたりした覺えはなうても、無始劫來の罪過を一時に懺悔すれば、  
諸の罪根悉く消え失せて、未來永劫に失はない戒牒を受けて、大安

樂の境界になられる。箇様な譯で佛祖の正傳の懺悔受戒が直に彼  
の限りの無い眞如法性の本體を顯はすによつて、泡そのまゝが大  
海の水であると同じやうに、此の身此の儘が直に眞如法性の姿と  
なるから、其後の仕る事爲す事が皆眞如法性の作用と爲つて、即ち  
發願行持の利生報恩となる。

○參 考

- 有愧の人は則ち善法あり、若し無愧の者は諸の禽獸と異なることなし。(佛經)
- 人誰れか過なからん過ちて而して改むる之を君子と謂ふ。(語論)
- 耻の人に於ける大なり其之を得れば則ち聖賢之を失ひは則ち禽獸なるを以てなり。(孟子)
- 宜しく自ら決斷して身を端しく行を正くして益諸善を作し己を修



○ 涇河の中に一升の鹽を投ずるとも、水に鹹味なく、飲む者覺らざるが如し、能觀の心強ければ、即ち重罪を滅す。(經樂)

○ まことあればかなはぬ道もかなふなり (喜惡上人)

○ 愚にもわが過をしらぬ身は (最明寺殿)

○ 身の上に思へばくやし罪とがの (藤堂高虎)

○ 背きして身はまよひ子の泣く聲を (二位重疊那)

聞きたらちねの捨て、置かめや

第參章 受戒入位

第十一節

次には深く佛法僧の三寶を敬まひたてまつるべし。生を易へ身を易へても、三寶を供養し敬ひたてまつらんことを願ふべし。西天東土佛祖正傳する所は恭敬佛法僧なり。

懺悔受戒發願行持と四大原則ある中で懺悔のお話は前回までに済んだので、今席からは修證義の第三章受戒入位と云ふ一番大切なお話になるが、今読み上げたのが修證義の第十一節受戒入位の第一最初に先づ三歸戒のご教訓じや、毎度お話に及ぶ通り我が曹洞宗の受戒と申すは、先づ第一に三歸戒を受けて次に三聚淨戒、それから十重禁戒と云ふ順序で、之を十六條戒とも申すことである。



が一昧我が宗には限らず何れの宗門に於ても大乘でも小乗でも、先づ三歸戒を受けないで外の戒法を授かると云ふことは無のてあるから、三歸に依て得戒するとも仰せられてある、眞宗などは無戒の宗旨で外の戒法の沙汰は少しも無いけれども、此三歸戒だけは必らず授けることに成て居る、日蓮宗は戒壇と云ふことを日蓮上人が三秘の随一として立て、置かれたけれども、ドウ云ふわけやら戒法の沙汰はなく、只法華經を授けるだけのこと成て居るけれども、ヤハリ此三歸戒だけは有るやうすじや、况んや其他の諸宗各派に於て外の事には如何やうな異議は有るとも、此三歸戒だけには何れも一致で、凡そ佛のお弟子たらん者三寶に歸依せぬ者のあるべきやうは無の尤も三寶に歸依せぬ者ならば、本より佛のお弟子では無いに依て此三歸戒に背くのが即ち十重禁戒の第十に不謗三寶戒と誡められてあるのが其れじや、サテ今讀み上げた御

文の初めに、深く佛法僧の三寶を敬まひたてまつるべしとある、佛と云ふは天竺の詞で佛陀耶と云のを略したので、漢の文字に譯せば覺者と云ふことになる、其れをまた日本の詞にすればサトツタ人と云ふこととて、即ち煩惱生死を離れて菩提涅槃に到りおふせた人と云ふこと、又法と云ふは天竺では達磨耶と云ふのを漢語に譯したので、日本ではノリと云ふが、ノリと云ても子供衆などには分るまいが、凡そ物事にチャンとキマリが有て、少しも味まし背くことの出来ないのが即ち法じや然し今佛教の上で法と云ふのは世間で立てたキマリでは無い、必らず佛の説かせられた最尊無上の道を云ふので、其道を受け繼ぎ傳へる人を僧と云ふ、此れも天竺で僧伽耶と云ふのを畧して常には僧とばかり云ふが、漢の語にすれば和合衆と云ふことに成る、中の好い人だちと云ふことじや、サテ此は佛と法と僧との三つが世の中に大切な物も多い中で尤も



大切なものであるから寶と云ふ字を附けて三寶と申したものの三寶と云ふことは昔し唐土の老子と云ふ人も自分流義の三寶を立てたところがあり、近來日本の百年ばかり前の儒者で太田錦城と云ふ人も私の三寶は鐵砲と女房と佛法じゃと云ふた身を修めるには佛法でなくては修まらない家の締りは女房に限る國を護るには鐵砲が必用であると云ふて、ボウと云ふ字の附いたのを三つ集めたのも面しろいが、其の身を修めるに一番必用であると云ふた佛法の其中で尤も大切なるが此三歸戒じゃ、ソコで此世一生ばかりでは無い生をかへ身をかへても三寶を供養し敬まひたてまつらんことを願ふべしとの御教訓ぞ生れかはり死かはり未來永劫いつまでも佛法僧に遭ひたてまつつて供養恭敬することの出来るやうな果報の身に成りたいと心懸けねばならぬのじゃ、毎度も話のある通り釋迦如來が爪の上へ土を少しばかりお載せなされ

て此土と三千世界の惣躰の土とドチラが多いぞと阿難尊者にお問ひなされた阿難尊者は餘りのことに呆れた顔して、ソレは世尊申しあげるまでもないとお答へ申しあげたら、能く聞け阿難、過去の無始劫以來人間に生れた者の多いことは、三千世界の土よりも多いて有らうが、其中で佛法僧の三寶に遭ひたてまつることの出来るのは、此爪の上の土よりも少ないぞと仰せられたと承たまはる。幾ら文明だの開化だのと自慢をしても、西洋各國などに生れた人たちは、氣の毒ながら是れまでは三寶と云ふ名だけでも聞たことが無かつた、其れさへ近頃は我國のお蔭で追々大乘佛法の道理を聞くことが出来るやうに成て喜こび勇んで居る人もあるやうす、然るに吾々も互ひは如何なる果報の目出たいことやら、先祖代々まぢりの無い大乘佛法と云ふ中にも、佛祖正傳の懺悔滅罪受戒入位の無上法門に躰も心も打ち入れて、位大覺に同じうし已る眞に是



れ諸佛の子なり」と云ふやうな仕合の身と成たことやら有難いと  
辱じけないとも申しやうも無い果報では御座らぬか其れと申  
すも西天東土佛祖正傳する所は恭敬佛法僧なり」と仰せられてあ  
る通り西天東土の佛や祖師が此佛法僧の三寶をお傳へ下された  
ればこそ斯る目出たい身の上とも成り得ることが出来たのじや  
西天と云ふは天竺のこと、東土と云ふは支那日本サテ其天竺に於  
せられては釋迦牟尼佛から迦葉尊者それから阿難陀商那和修と  
是れも毎々申す通りに二十八代相續して達磨大師の時になり天  
竺の御化導も濟ぜの上支那へお渡りなされての御開教それか  
ら六代傳はつて曹溪山の慧能禪師また五代たつて洞山の悟本禪  
師その曹溪の曹の字と洞山の洞の字とを合せたのが曹洞宗と云  
ふ名の本じやとも承たまはる其れから更に十一代目で高祖承陽  
大師さまが我が日本へお傳へなされた謂ゆる佛祖正傳の無上妙

法と申すのは佛法僧の三寶を恭敬すると云ふことの外には何に  
も無いぞよこの御教訓じや吾が國に於ては昔しから名將明君と  
いはるゝ人は何れも三寶に歸依せられたものと見えてその事蹟  
はチャンと歴史の上存して居る彼の「史徴墨寶」などいふものを  
觀れば歴代の帝王名將が三寶歸依に關する自筆が澤山あるが、あ  
れを見てもその歸依の程がどれ位であつたかといふことが分る  
しかるに近世になつてからは三寶歸依などいへば人前で肩身  
がすばまるやうに思ふやうな人が多くなつたが誠に歎げかはし  
き次第である。しかしそれは世の風潮につらされて心の定まらぬ  
人のことであつて皆々そうといふわけでは決してない。畏れ多い  
ことながら先年御崩れあらせられた英照皇太后陛下には宿縁の  
深かりしか御年未だ十歳に満たせ給はざる御幼少の頃御父尙忠  
公に伴はれ清水寺に御參詣の砌四方の景色麗しく音羽の山地主



の櫻さては白糸の三筋の瀧も御心に適ひけん御歸邸の後かねて  
學ばせ給へる丹青美事に清水寺の風景を描き給ひて之を表装し  
て額となし清水寺に奉納し給ひしと承る又嘉永年間皇居炎上の  
災に罹つて皇居御造營中陛下は特に御内佛に御心を籠めさせら  
れ浴西七條村の水樂師寺へ御内佛を預けさせられ皇居落成まで  
は同寺に於て奉祀念たらせ給はず孟蘭盆會の靈祭には殊に陛下  
の御心添を以て御供養の菓物野菜迄一々に御取揃ひあそばされ  
御付の女官をして同寺へ持たせ給ひしには皆々その三寶御歸依  
の深きに感じ奉らぬはなかつたと承る陛下の御事蹟と並べて申  
すは一入畏れ多いけれども東京醫科大學教授の丹波敬三居士は  
先年撰拔せられて獨逸に留學し醫術の秘奥を究めて歸朝し専ら  
力を斯道の爲めに盡して居られるがその舍兄なる神戸市會議員  
丹羽鎌造氏并に舍弟良造氏も共に深く三寶を信じ徳行の開へあ

る人であるがこれは其の母堂の教訓の然らしむる所だといふ母  
堂は灘新在家村柴田氏の娘で丹波元禮居士に嫁してより舅姑に  
事へて至孝所天に仕へて貞順であつて元禮氏は醫を業とせられ  
少うして蘭學を修め能くその術に長せられしが時の不運に際し  
て世に用ゐられざるより敬三氏等に其の學を教へて居る中不幸  
にして明治元年九月といふに逝去せられたによつて母堂は只管  
貞操を守つて種々の困難を凌ぎ四人の小供を養育致されし甲斐  
あつて敬三氏はその後東京に出て父の志を繼いで醫學を修め盡  
は自分の學問をなし夜は兒童を教へて學資の足らぬところを補  
ふて一心不亂に學問せられたが後果して政府より抜きあげらて  
獨逸に留學し歸朝して大學の教授となられた長男の鎌造氏少弟  
の良造氏は母堂を助けて商業に従事し大いに家計を興して縣下  
屈指の財産家となられたさて母堂は幼少より深く三寶を信じて



居られたから、鎌造良造の二人は、日夜その薰陶を受け、厚く三寶に  
歸依して常に精進戒法を守つて、少しも違ふといふとはなかつた  
が、敬三氏も生れつき徳行を重んじて居られたなれども、幼少より  
母堂の膝下を離れてその薰陶を受けることのなかつたのを遺憾  
に思ふて、母堂は去る廿八年命終の際に臨み、特に敬三氏を呼び自  
分の念珠を授けて遺言して云はれるには、妾は不幸にして早く夫  
に別れてより、誓つて卿等四人の子を人となして、夫の意を空うせ  
ぬやうと心懸けたが、幸にして四人共に人となつたれば、遺憾に思  
ふことのないのは、偏に三寶加被の力と思ふて居る。三人の子等は  
妾の膝下に居たから、三寶に事ふる道も心得て居るけれども、卿は  
早くより妾の手許を離れて居たから、或は歸依の心が薄からうか  
と思ふによつて、今此の念珠を授けるから、どうぞ妾の遺言を守つ  
て、終身誓つて三寶に歸依して、道徳を行ひ、父祖の恩を報じ、子孫に

美風を貽されよといと、懇に諭されて遂に七十七歳を一期として  
不歸旅に赴かれた。ソコで敬三氏は深く母堂の遺言に感じ、葬式を  
終へて東京に歸るや否や、目白の僧園に行きて、雲照律師に母堂の  
遺言を告げ、自ら誓つて終身三寶に歸依し、佛法を外護しやうとい  
ふことを約せられたが、廿九年一月は母堂の忌日とて、いと町噂な  
る法會をつとめられたといふことじや、丹波氏の母堂の殊勝なる  
ことは申すまでもないが、近頃の學者には、兎角佛法を信ずる者の  
少ないに、敬三氏が母堂の遺言を守つて、終身三寶歸依の誓を立て  
、それを實行せらるゝは、誠に感心なことである。高祖大師は末世  
の吾々を赤子の如くに思召して、三寶を供養し、敬い奉れと御示下  
ださるゝは、丁度丹波氏の母堂が敬三氏に遺言せられると同じい  
やうなものであるから、各々方々も敬三氏が母堂の遺言を守つて三  
寶に歸依される如く、終身はをろか未來永劫佛法僧の三寶を恭敬



せられたいものである。何故と申すに佛祖正傳の無上妙法と申すは佛法僧の三寶を恭敬する外はないぞよとの御教訓じやほどにかやうに手易く申したなら三歸戒の外に三聚戒も十重禁戒も入らぬかと疑ふ人もあるて有らうがそれには深いわけのあるのでこの三寶といふことに三種の功德といふことがあつて一鉢三寶現前三寶住持三寶との差別がある其等の話を委しくすればなるほど其うかと合點のゆく筈ではあるがこれから次の第十二節も又その次の第十三節も皆此の三歸戒のことに就いて御深切の御教誡であるから追々席をかさねて御取次に及ばうか先づ今日之處では深く三寶を敬いたてまつるべし生を易へ身を易へても三寶を供養し敬ひたてまつらんことを願ふべしと仰せらるゝ御詞だけを身に染みて頂戴奉持しサテ又西天東士の四七二三乃至洞山天童から永平總持と御相續の佛祖の御恩を心に籠めて發

願利生行持報恩一日片時も無常の命を徒らに費やさぬ様寐ても寤めても南無歸依佛南無歸依法南無歸依僧と口に唱へて心の持ちやう身の振まひ佛の御子に相應するやうにつとむるが肝要

○參考

- 佛法僧寶は邪を出づるの大津正に入るの要門なり之れに順ふ者は必ず常樂を證し之れに背く者は常に苦海に沈む(梵網經)
- 佛を念ずること醫王の如く法を念ずること良藥の如く僧を念ずること瞻視人の如くすべし三者已に備れば則ち煩惱の病瘥すべし(山師)
- 三寶を所歸となす所歸は救護を以て義となす人の王に罪あり異國に投向し以て救護を求む異國王の言く汝來て畏ることなかれ我が境を出づるなく我が教に違ふことなくんば必ず相救護せんと衆



生も亦爾り魔に繫屬し生死の罪あらば三寶に歸向し以て救護を求むべし若し心を三寶に誠にし更に異向なく佛教に違はずんば魔王邪惡之を如何ともすることなし(大經方便)

○もろともにわたす御法をたのむかな (頓阿法師)

○聞きうるぞやがてほとけのみなれ棹 (道遠院)

○心をばいかなるものと知らねども (一蓮上人)

名をとなふれば佛とぞなる



第十二節

薄福少徳の衆生は三寶の名字猶ほ聞きたてまつらざるなり何に況んや歸依したてまつることを得んや徒らに所逼を怖れて山神鬼神等に歸依し或は外道の制多に歸依すること勿れ彼は其歸依に因りて衆苦を解脱すること無し早く佛法僧の三寶に歸依したてまつりて衆苦を解脱するのみに非ず菩提を成就すべし

近頃は耶蘇教だの回々教だのと云ふ西洋の教法が頻りに外から入つて来るソレに又日本の内でも天理教だとか連門教だとか誠に怪しい教法が幾らも出来て何ともハヤお話にもならぬ不都合なことも有るがサテ困つたもので其れが畢竟薄福少徳の衆生の多い故であると思へば誠に悲いこととて御座るサテ只今讀み上げましたのが即ち修證義の第十二節の御文で此前に歸依三寶



をお諭しに成た御教訓に續いて、外道邪教に迷はせぬやうにと思  
し召すは慈悲の上のお慈悲で御座る。本式に三歸戒をお授けにな  
る時の儀軌の御文には、手短かに「餘の邪魔外道等に歸依せざれ」と  
ばかり仰せられて有るのを、此處には御叮嚀の御教訓先づ第一に  
「薄福少徳の衆生は三寶の名字猶ほ聞きたてまつらざるなり、何に  
況んや歸依したてまつるとを得んや」と仰せられてある。薄福少徳  
と云ふは前の世からの因縁が悪くて、此世の果報の拙ないものゝ  
ことじや。毎度お話をす通り、人身受け難し今已に受く佛法聞き  
難し今已に聞くと云ふので有るから、人間の身に生れて來ただけ  
でも、中々容易な果報では無いに、其上にまた佛法と云ふ中にも、佛  
祖正傳の佛戒を受けたてまつることの出來ると云ふは實以て並  
大抵なことでは御座らぬ。然るに其れと反對で、薄福少徳と果報の  
足りない身の上では、切角人間に生れた甲斐もなく、佛とも法とも

三寶のを名さへ聞くことの出來ないものが随分多い、お名さへ聞  
たことの無い身が、ドウして三歸戒を受けたてまつって、佛法僧に  
歸依することが出來ましやうぞ。此事は外のお經には「父母三寶の  
名字をも聞かずと仰せられた所もあるが、父母と云へばチ、ハ、  
じや、切角親子と生れて來ても父とも母とも云ふことも知らぬも  
のが、ドウして孝行することが出來やうぞ。マ、現に犬猫などを御  
覧なされ、親となり子となつて生みつ生まれつ育てたり育てられ  
たりする様は少しも人間と違ふたことは無い。然るに其生み育て  
する方でも、自から親じやと云ふことも知らず、況して父親に成た  
犬猫は、彼れが己れの子だとも知らず、子の方も亦た其通りで、父と  
云ふものゝあることを本より知らんのみでは無い。母と云ふ名も  
聞いたことは無く、只天然の有様で乳房を含んで育てられるまでの  
ことと有るから、乳房に用が無くなれば、親とも子とも互ひに知ら